

峰。立場？

校長。いろく、君、わたしにすると。——いろくそこにうるさいことがあるんでね……

峰。しかし、それは、——被仰るのは野上に對してだけの立場ぢやアないでせうか？

校長。野上に對してだけの？

峰。さうです。——ほんたうのあなたの立場ぢやアないと思ひます。

校長。それは、君……

峰。ほんたうのあなたの立場となれば、さういふ不足がましいことをいつて來たものに向つて、ことさら、ことの是非をあきらかになさるべきだと思ひます。

校長。………

峰。かういつては失禮ですが、あなたはすべてにあんまり御斟酌をなさりすぎると思ひます。——餘計それでおいとのやうな子供はつけ上ります……

校長。（否定するやうに）しかし、そんなことは……

峰。いゝえ、それはさう被仰れないと思ひます。——はつきりこれだけはいへます……

校長。それはさう理窟をいへば……

峰。理窟ぢやアありません、事實です……

校長。でも、君……

峰。………

校長。（強ひてわらふ）それは、まア、君にしてもいろくいひたいことはあるだらうが。——まア、そこを。——そこを一つ……

峰。………

校長。どうだらう、君……？

峰。………

校長。ふせうしてもらへまいか、今日のところだけ？

峰。ふせうして、しかし……？

校長。だから、ふせうして、わたしの顔を立ててもらへないだらうか？

問。

峰。折角ですが……

峰、急に立上る。——手早く清書の直しかけを風呂敷につむむ。——インクと筆を抽斗に入れる……

校長。峰君……

峰。失禮します。（かまはず机のそばを離れる）



校長。君、峰君……

校長の再びさういつたとき、峰、すでもう階下へ下りてゐる。  
間。

露地の下を研屋とほる。——「はさみ、庖丁、かみそり研ぎ。——はさみ、庖丁、かみそり研ぎ……」とゆつくりした調子に呼んで行く聲……

校長、ぼんやり立ちすくむ。——人知れず吐息をつく……  
やゝ長き間。

階下から、男と女の、にぎやかに交つた聲きこえて来る。——間もなく、たか子をさきに、高桑、佐々木、どや／＼といふ感じにあがつて来る。

たか子。高桑さんと佐々木さんがいらつしやいましたわ……(といひかけて) あら、峰さんは？ (あたりをみまはす)

校長。(不機嫌に) 歸つた……

たか子。あら、いつ？

校長。いまだ。

たか子。ちつとも、あら、知りませんでしたわ。——いつ玄關を出て行つたらう？——(高桑に) ね

え、あたしたち気がつきませんでしたわね……

高桑。(うなづく) え……

たか子。必とあたしたちが話をしてゐたんで黙つて歸つたんですわ。——必とさうですわ。——ほんとにへんな人……

高桑。先生、趣意書の下書が出来たんですが……

校長。あゝ、それは……

高桑。みていたゞいて、すぐでも今日、印刷屋へまはさうと思ふんですが。——さうしないと間に合ひませんから……

校長。……

高桑。(佐々木に) 君……

佐々木、ふところから原稿用紙二三枚に書いたものを出す。——高桑、うけとつて校長にわたす。  
たか子。(そばから) まア綺麗！——まるで女の書いたやうな字……

高桑。(如才なく校長に) 記念といふ字を入れる説と入れない説と兩方あるんですが、これはしかしどつちが宜しいでせう？

校長。さア……



高桑。入れると大寺小學校創立二十年記念祝賀會。——そのほうがはつきりしますが長すぎると思ひます。——たつた二字でたいへんしつこくになります。

校長。少しでも、それは、いひ易いはうがいでせうね。

高桑。(佐々木をふり返つて) そら、君……

校長。しかし、わたしは、眼鏡を……(袂をさぐる)

たか子。階下ぢやありませんか？

校長。と、思ふが……

たか子。とつて來ませうか？

校長。しかしこゝにゐたんではどのみち仕方がない。——階下の教場へ行かう……

たか子。(高桑と佐々木に) そら御覽なさい。——だから、あたしが、どうせ階下へ來るんだから呼んで來て上げませうつていふのに無理に來るつていふんですもの。

高桑。だつて大ぜいゐるのに……

たか子。いゝぢやありませんか、大ぜいゐたつて。——いくらゐたつて、みんな、お針の人たちばかりぢやありませんか。——(わざと) 大丈夫よ、とつて喰べようとは誰もいはないから……

高桑。いゝえ、それアね、とつて喰べられても構ひませんがね……

たか子。あれだ！

校長。(さうしたとりやりを聞くに堪へないやうに) と、とにかく階下へ行かう……

校長、自分からさきへ立つて階下へ行く。——たか子、高桑、佐々木、そのあとにつづく。高桑、密とたか子のうしろからいたづらをしかける……

## 第二場

大寺學校の住居。——といつても教場の一部についた六疊と四疊半ほどの二夕間。——六疊のはうは校長の書齋。(但し、晝間は、たか子がそこで四五人の裁縫の弟子たちをとつてゐる)——四疊半のはうには、茶箆筒だの、長火鉢だのが置いてあつて臺所につづく。——玄關へのかよひ路に狭い廊下がついてゐる。

前の場と同じ日の午後八時すぎ。——たか子、座敷の眞ん中に鏡臺を出して髪を結つてゐる。お久、そばにすわつてそれを見てゐる。——教場のはうに向いた障子に燈火のかげのさしてゐるのが、校長の「夜學」の子供たちを教へてゐることを語つてゐる。

……細々とさびしい蟲の音。

やゝ長き間。



……たか子、髪を結びをはる。

たか子。 あゝ、やつと出来た。——すぐのつもりが……(柱に懸つた時計をみて)あら、八時すぎよ、もう……

お久。 えゝ。

たか子。 戲談ぢやアない、一時間の餘もかゝつたわ。

お久。 眞逆……

たか子。 いゝえ、かゝつたわよ。——あなたの來たの、まだ、七時だつたもの……

お久。 えゝ、でも……

たか子。 あんまり、はじめ、お饒舌しやべりしたのがいけなかつたんだわ。——あれで手がお留守になつたんだわ。——どう……？(お久にみせる)

お久。 よく出来ましたわ。

たか子。 さうかしら？——自分ぢやア何だか……(はうとく觸つてみる)

お久。 氣に入りませんか？

たか子。 駄目ね、矢つ張。——時間のかゝるときはかゝるだけのわけが矢つ張あるんだわ。——お饒舌したからばかりぢやアないわ。——こゝんとこ、いろ／＼じれつたい、くさ／＼することは

かりあるもんだから……

お久。 ……………

たか子。 いゝわ、明日また結び直すから……(が、未練になほ鏡の中をのぞく)

お久。 以前、よく、圓鬚まゆげに結つてらしたぢやアありませんか？

たか子。 よくでもないけど……

お久。 またお結ひになつたら？——よく似合ひますわ。

たか子。 とき／＼はあたしも結ひたいと思ふけど。——でも、先生が嫌な顔をするから……

お久。 どうしてとせう？

たか子。 どうしてだか……

たか子、油の手をふく、——散亂ちらかつた鏡臺のまはりを片づける。——とも／＼お久も手傳ふ。

間。(……蟲の音)

たか子。 さ、行かう。——お待ち遠さま……(立つ)

お久。 お師匠さん、このピンは？

たか子。 あゝ、それ。——いゝわ、鏡臺なかへ入れといて頂戴……

お久。 ぢやアこゝへ入れときますわ。(抽斗をあけて入れる)



たか子。あんた、お湯の道具は？

お久。あつちにあります。(臺所のはうへこなし)

たか子。ぢやア、もう、出かけていゝわ。——あたし、すぐだから……

お久。ぢやアさきへ出て待つてます。

お久、臺所のはうへ出て行く。——たか子、鏡臺をいつも置いてある位置に直したあと、簞笥から羽織を出して着替へる。

たか子。(教場のはうに向いた障子をあけて)ぢやア、一寸、お湯に行つて來ますから……

たか子、そのまま臺所のはうへ出て行く。

やゝ長き間。(……蟲の音)

教場のはうに「夜學」の子供たち(二三人)のかへつて行く物音きこえる。——しばらくして教場のはうに向いた障子の燈火あかりのかけ消える。——校長、入つて來る。

間。

校長、机のまへにすわる。——入念に墨をすり出す。——ほまち仕事の、琴の目ろくを書く仕事にとりかゝる。

外の聲。御免……

校長。はい……

障子あく、——廊下に、光長、立つてゐる。

校長。お入り……

光長。へえ……

光長、入つたあとを閉める。——校長、筆をおいてむき直る。

光長。行つてまゐりました。

校長。御苦勞でした。——(不安げに)どうでした？

光長。どうも、いえ、分りにくいところで……(わらふ)

校長。(げんらしく)番地をしかし……？

光長。その番地を、いえ、さがしますのに大骨を折りました。——實は、わたくし、あちらのはうは始めてど。——それには、小梅といふところを、あんな廣いところと思ひませんでしたので……

校長。わたしもよくは知らないが……

光長。いつそ土手から入ればよろしかつたのを、正直に水戸さまの裏へまはつたもので、暗さは暗し、搔暮見當がつきません。——やつと煙草屋をさがして番地を訊くと分らないといひます。



——かういふ植木屋はないかといふところには植木屋だらけだから分らない。——さういふ覺束ない返事で……

校長。……………

光長。仕方なく、今度は、植木屋でさがしました。——同業者をそれからそれたづねました。——それでやつと知れましたが、何の、あなた、まるでそれまで見當のちがつたところをあるいてをりましたんで……(わらふ)

校長。で、ゐましたか、峰君は？

光長。をりました。——ちやうどいゝ鹽梅に、いま歸つて來た……といふところで……

校長。といふと？

光長。學校のかへりに、深川の、もとの主人のうちへまはつたとかで……

校長。もとの主人？

光長。辯護士とかいつてをりました。

校長。で、してくれましたか、話？

光長。いたしました。——よくあなたのお心もちを傳へました。

校長。で、何と……？

光長。へえ、峰君よく分つてくれました……

校長。(ホツとしたやうに)分つてくれた？

光長。へえ、自分もわるかつた。——自分もいひすぎた。——たとへ何であらうと校長にあゝ言葉返すといふことはなかつた。——君からよく校長にお詫してくれ。——さういつてをりました。

校長。いえ、そんなことは。——もとゝこつちも無理をいつたんだから……

光長。へえ。

校長。で？

光長。しかし。——勿論、いえ、お詫をしてくれといふ位で、そのことについては何とも思つてをりません。——何ともう思つてはをりません。——が、先刻その。——先刻學校を出たときはわけもなく料簡がいきり立つてゐた。……と、峰君、笑つてさう申すんで、そのつまりいきり立つたまぐれ、まゝよ、二度ともう學校の鬨はまたがない。——で、すぐ、深川の、もとの主人のうちに駈けつけて實はこれ。——氣の早い話、身のふり方をたのみましたのださうで……

校長。……………

光長。と、ちやうど、では、事務所に缺員がある。お前ならいゝから入れてやる、明日からやつ



て来い……

校長。……………

光長。と申すのが、いろ／＼聞きますのに、主人といふ條いくらか縁も引いてをりますんださうで、まへにそこを出ましたのも、申せば、峰君、自分の勝手に、一人で當分勉強したい。——で、こなたの御厄介になりましたやうなわけ。——従つて、歸るのにも、何のいさくさもないわけ……

校長。……………

光長。校長の折角さう被仰つて下さるのを。——折角のその御好意を無にいたすやうで何とも相濟まないわけですが。——といつて、その、これを峰君、わたくしに。——それはこまる。——わたしにそれは取次げない。——固くさう申したんですが……

校長。……………

光長。とにかく御覽をねがひます……

光長、峰にことづかつて来た封書を密と校長のまへに置く。——校長とり上げる……

光長。辭職といふことは、この場合、何としてもおだやかでない。——世間の思惑もある。——くり返しさう申したんですが、そこは若いだけ、一旦かうと思ひこむと……

校長。……………

光長。いづれお目にかゝつてお詫もいたします。……これまでのお禮もいろ／＼申述べます。——ついでかうしたことはなつたものゝ、決してそんなわけではない、いはゞ一身上の、いつまで自分も安閑としてはゐられない。——あと二三年にどうしても試験をとらなければならぬ。——さうしなければ郷里の親に顔むけが出来ない。——それにはちやうどいゝ機會だから……

校長。……………

光長。さういはれますと。——峰君のお父さんとわたくしとは同年で……

校長。……………

光長。わたくしにいたすと、しかし、折角おつかひに立つて甲斐のないことになりました。——何とも。——何とも面目ございません……

問。

校長。いえ、さういふことなら。——仕方がありません。(峰の辭職届を封筒のなかにまた入れる)

光長。へえ。……

校長。峰君の、正直な、生一本な氣性を知りながら今日のやうなことをいつたのがそも／＼の間違ひ。——峰君に愛想をつかされても文句はいへない。——峰君につみはない……



光長。(もじく)とさう被仰られると、しかし、わたくしの昨日早くかへらしていたどいたのがそもぐの間違ひで。——わたくしさへ早くかへらなければ、峰君、わたくしの代りに階下へ下りることもなく、峰君が階下にさへ下りなければ、二階で、野上と田宮とさうした喧嘩をすることもなかつたわけで。——わたくしのために飛んだ……

校長。そんなことをいつたら限りが無い。——そんなことをいつたら、野上のうちとわたしとの關係。——それを峰君にわたしの話さなかつたのが一番わるい……

光長。でも……

校長。これは、いえ、あんたでも御存じない。——野上のうちの先代とわたしとは、その以前、一丁目の紺屋の露地で、隣同士同胞のやうにして十年あまり暮した……

光長。………?

校長。そのうち向うも表店へ出る、こつちもそれまでの寺小屋を學校にする。——親類にならうと兩方で約束した。——だから先代の死んだときわたしは施主に立つた……

光長。………?

校長。さういふ古い附合。——が、向うは年々にのだつばかり、こつちは年々に衰微するばかり。——それにはその古い附合を知つてゐるものがだんぐなくなつた。——さうなると、以前を知つ

てるものがみればあたりまへのことでも、知らないものがみると不思議に見える。——それだ。

——峰君がおいと、いふあの子供の我儘に腹を立てたのもつまりはそれ……

光長。いえ、それは。——野上のうちと特別御懇意になすつておいでことはわたくしでも承知してをります。——が、さういふしかし御關係とは。——微塵わたくし……

校長。いゝえ、それは、たか子も知らない。野上のうちのものも誰も知らない。——知つてゐるのは——多少でも知つてゐるのは野上のいまの當主だけです……

光長。………

校長。といへば。——といへば、まア、大てい分つてもらへると思ふが。——いろくそこに面倒なことがあつてね……

光長。……(うなづく)

問。

……時計、九時をうつ。

校長。(心もちをかへて)幸ひ明日は日曜でもあり。——何とかあとの始末はつけませう、明日のうち……

光長。では、また、明朝でもわたくし一寸うかどひます。



校長。御苦勞つひでに、一つ、さうして下さらんか。——御病人のあるところをお氣の毒だが……

光長。いゝえ、病人のはうは、先刻もう娘がかへつてまゐりましたから……

校長。といつて外に相談相手はなし……

光長。おそれ入ります。——では、今晚はこれで……(いひかけて思ひ出す)あゝ、それから圖書の

清書を……(障子のかげから新聞づゝみをとりに出す)——あとに、まだ、作文の直しが一つ残つてをり

ますさうですが、それはいづれあとからお届けいたすさうで……

校長。あゝ、さうですか……

光長。お邪魔いたしました……

校長。生憎、たか子、湯にいま行つたもので。——お茶も上げないで……

光長。いゝえ、もう。——實は、かへりに、峰君と一寸蕎麥を喰ひまして……

校長。道理で、みえたとき、すこし御機嫌だと思つた……(さびしくわらふ)

光長。(やゝ狼狽てゝ)いゝえ、そんな。——そんなに決して……

光長、廊下に出る。——校長、ともにおくつて出る……

間、

校長、歸つて来る。——圖書の清書の直しをあけてみる。——すぐ、また、もとのやうに叮嚀につゝ

んで棚のうへに置く。——机のまへにすわる。

間。

……このうち始終蟲の音。

臺所のはうから、たか子、濃くつけた白粉の顔はれんと入つて来る。

たか子。たゞいま……

校長。……

たか子。ぼつ／＼降つて來たわ。

校長。……

たか子、先刻のやうにまた鏡臺を出して来る。——そのまへにすわる……

夜行くとそれアこむんですもの、お湯。——おち／＼洗つてなんぞゐられやアしない……

校長、しづかに筆を行る。

……蟲の音。——雨の音だん／＼高くなる。(幕)



## 第二幕

四〇八

大寺學校の教場。——たゞし階下。——廣い、のべたらな場所を、黒板でたゞいくつかに仕切つたその一部。——階上(第一幕第一場)と違ふところは、稽古用の大きな算盤だの、オルガンだの、掛圖だの、尋常科らしい感じのするものがある。配置されてゐる。

十月下旬の晴れた午後。(前まくの十日あまり後)——佐々木、オルガンにむかつて一人で「越後獅子」を弾いてゐる。——窓の外に日の光があかるい……

……たか子、入つて来る。——密と佐々木のうしろに立つ。

間。

佐々木、弾き止めて、ふと、ふり返る。

たか子。 うまいわね……

佐々木。(やゝ含羞<sup>はにか</sup>んで)戯談でせう。

たか子。 いゝえ、ほんたうに。——誰かと思つたわ。——習つたの、あんた！

佐々木。 習うもんですか、こんなもの……

たか子。 ぢやアどうしてさう弾けるやうになつたの？

佐々木。 どうしてつて……

たか子。 あたし、田舎から來た當座、どうかして弾けるやうになりたい。——さう思つて随分やつてみたわ。——でも、駄目。——いくら教はつても、教はつたそのときだけで、あくる日になるとすぐ忘れてしまふの。——「君が代」を覚えるのに一ト月の餘もかゝつたわよ……

佐々木。 何か、一つ覚えれば、あとは……(いひながら「君が代」の中ほどまで弾いてみる)

たか子。 そらね。——なか／＼さういふやうに。——さういふやうにあたしたちがやつたんぢやア行かないんだから嫌になツちまふ……

佐々木。 コツですよ。——コツさへ飲込めば……

たか子。 だつて肝心の指がいふこと聞かないぢやア……

佐々木。 それだつて始終やつてれば自然とうごいて來ますよ。

たか子。 器用なのよ、あんたは。——何でも、つまり、手さきですることが。——晝だつてあゝうまいしさ……

佐々木。 好きなんですよ、それより……

たか子。 もつと、何か、弾いて御覽なさいよ。

佐々木。 何を……？

大寺學校

四〇九



たか子。何でもいゝわ、面白さうなもの……  
佐々木。何がいゝだらう？

佐々木、また、オルガンのほうを向く。——すぐに「春雨」を弾きはじめる。  
間。

校長、玉守をつれて入つて来る。——あとに、光長、従ふ。——佐々木も、たか子も気がつかない。

校長。(不機嫌に) たか子……

たか子。えい (何ごゝろなくふり返る。——玉守をみて一寸でれる)

……佐々木、やゝ狼狽てゝ、弾き止める。

校長。あつちへ行つて茶を淹れかへときなさい。

たか子。(つんとした感じに) はい。

たか子、「御免を——」と玉守のわきを通つて出て行く。

校長。(玉守に。——機嫌よく) こゝが三年に四年。——光長君のうけもちです。

玉守。(きどりをみせて) はゝア……

校長。男女合せて、三年が十七人の、四年が十五人……だつたね、君。(光長をふり返る)

光長。さやうで……(うなづく)——この間、三好金次郎の同胞きやうだいと高橋ふみとが退きましてすから……

校長。(玉守に) 矢つ張わたしどもへ来る子供は、古くからこの土地にゐつたもの。——それこそ親の代からわたしを知つてる……といった工合のうちのものが多いんで……

玉守。ふ、ふん……

校長。それがこゝんところ、市區改正といふ奴で、さういふ古い手合がだん／＼外へ引越して行きます。——さうなると、自然。——いゝえ、なかには強情に、知らないところへかよはせては子供が可哀さうだ。——さういつて、越したさきから、遠いのをいとはずいまだに通はして来る親たちもあります……

玉守。(ハンケチを出して口のまはりを拭きながら) しかし。——極めてしかし、家族的な……

校長。それは。——それは、もう、家族的といふことはわたしのむかしからの念願で。——その點からいふと、むやみに大ぜいの子供を誰でもよしにあづかるより氣ごゝろの知れた、すこしの子供の面倒をみるほうが、どうもほんたうのやうに……

光長。一時のやうぢやア、實際。——三年と四年だけでも八十七人をりましたんですから。——とても、あゝなると、一人ぢやア手がまはり切りません……(理由もなくわらふ)



校長。あの時分はうちばかりぢやアない。——宮部でも、紅雲こううんでも、毎年申込を断るのが一ト骨

だといつたもんだ……

玉守。算盤をおやりになるんですか？

校長。これがわたしとところの味噌でしてね。——時勢遅れだといふものもありますが、何分にもこのあたり、商人あきんどやの多いことで……

玉守。なるほど……

たか子、かへつて来る。

たか子。よろしうございます。

校長。ぢやア、まア、あつちへ……

校長をさきに、玉守、光長、去る。——たか子、残る……

佐々木。何です、あれ？

たか子。今度来ることになつた先生よ。

佐々木。あゝ峰さんの代りに……

たか子。えゝ。

佐々木。おツそろしい、まア、あたまを光らしたもんだな。

たか子。早稲田にゐたんですとさ。

佐々木。(信じられないやうに) 早稲田に？

たか子。さういつて光長さんが連れて來たんですわ……

佐々木。ほんとかしら？

たか子。大へんいゝとこの息子さんなんですとさ。——それで何にもしなくつてもいゝんだけど、遊んでゝも退屈だから……

佐々木。僕ア峰さんのはうがいゝなア。

たか子。あんたは知らないのよ。——知らないからさういふのよ。——あんな、あんた、強情な、へんくつな分らずやつてあるもんぢやアないわ。

佐々木。でも、あたまを短く刈つた、あの、氣取つたところのちツともない、厭味のない。——小学校の先生は、矢つ張、あゝいふはうが僕アいゝな。

たか子。出來ないのよ、あれは。——したくつても出來ないからあゝ構はないのよ。——若いんですもの、峰さんだつて。——出來れば、それは、いくらだつてお洒落することよ。

佐々木。侮辱ですよ、それは。——可哀想ですよ、さういつちやア……

たか子。いゝえ、さうよ。——男つてさういふものよ。



佐々木。ぢやア、あなたは、袴をあゝする／＼引きすつた、白い足袋を穿いた。——あゝいふにやけた恰好を好いと思ふんですか？

たか子。好いとも思はないけど。——でも、何よ、にやけてみえるのは色が白いからよ。

佐々木。浮氣なんだなア、たか子さんは……

たか子。あら、どうして？

……そのすこしまへより聞えてゐた物産やの拍子木の音だん／＼近づいて来る。——それと一しよに「有難う。——有難う。——蟻が十なら、みゝずが二十、蛇が三十五で嫁に行く」とくり返してはやす滑稽な賣聲がだん／＼はつきり聞えて来る。

たか子。物産やが来たわ。(窓のそばへよる)

ともに、佐々木、さそはれてそばによる。——二人、外をみて立つ。

間。

高桑、入つて来る。

高桑。(あたりをみまはして) 岩田、まだ、来ないか？

佐々木。(ふり返つて) まだ……(窓のそばを離れる)

高桑。何をしてやアがるんだらう、彼奴？——三時まで必と！——あんなに固く自分からいつ

ときながら、——四時ぢやないか、もう……(いそがしさうに時計をみる)

たか子。いらつしやい。

高桑。今日は。——(佐々木にまた) それから岩井屋さん来なかつたか？

佐々木。岩井屋さん？——いゝえ……

高桑。片倉さんも？

佐々木。来ない。

高桑。可笑しいな。

佐々木。来ることになつてるの？

高桑。なつてるんだ。——昨夜、仲見世で、岩井屋さんに逢つたから、明日いよ／＼プログラムを拵へます。もし好かつたらおいで下さい。——さういつたら、外にもいろ／＼お打合したいところがあるから、では片倉をさそつて三時ごろうかどひます。——はつきりさういつたんだ……

たか子。ぢやアみえますわ、もう。——あの方たちなら大丈夫ですわ。

高桑。けど、たか子さん、前景氣甚だいゝですよ。——いまゝで、岩井屋さんの、發起人になつてもらひにあるいたところではどこでも喜んで、それはいゝこつた、是非それは骨を折らう。——みんなさういつたさうです。——だから、早くプログラムを拵へて切符を賣りにかゝれば五百や



六百はすぐに掛ける。——岩井屋さんも大乗気で……  
 たか子。だつて、そんなに、五百人も六百人も来たら入るところがないぢやアありませんか？（可笑しさうにわらふ）

高桑。それア入りますよ。——入れてみせますよ。

たか子。だつて……

高桑。細工はりう／＼仕上を御覧じろ。——それより賣店はいゝんでせうね——やつてくれるんでせうね？

たか子。えゝやりますわ。——そのつもりでみんなにもゝうさういひましたわ。

佐々木。なんと何を賣るんです？

たか子。珈琲に、カステラに、お煎餅。——けどねえ、高桑さん……

高桑。………

たか子。珈琲より、あたし、この學校の人たちなら甘酒のほうがよかアないかと思つて。——ハイカラすぎるわ、珈琲は……

高桑。だつて大へんでせう、甘酒は？

たか子。あら、珈琲のほうがよッぽど大へんだわ。——第一道具だつてありやアしませんわ。

佐々木。いつそ蜜豆をやつたらどうです？

たか子。いゝえ、お玉ちゃんなんかしきりにさういふのよ。——自分たちが好だもんだから……

佐々木。でなければ、ゆで小豆……

たか子。あら、ゆで小豆は……（輕蔑するやうに）

高桑。まア、何でもいゝから儲けてさへくれゝば。——プログラムには、たゞ賣店の設備あり。

——さうとだけ書いて置きますから……（ふところからプログラムの原稿を出して鉛筆で書入れる）階

上、賣、店、の、設備、あり……

たか子。みんな、お揃ひに、赤い襷をかけるつもりですわ。

高桑。（それにはこたへず）それから三曲合奏のことはどうなつたでせう？

たか子。あゝ、それは、お久さんとこまで返事が来ることになつてゐるんですけど。——生憎今日はお休みで。——明日ぢやアいけません？

高桑。たしかにやつてくれることはやつてくれるんですね？

たか子。えゝ、それアもうやることは。——たゞ三味線を弾く人がきまらないだけなんですわ。

高桑。それもぢやアよし、と。——（鉛筆で机の縁を叩きながら）あゝさうだ。——おゆきちやんて子がゐますね？



たか子。おゆきちゃん？——あゝ藤木の……？

高桑。苗字は知らないけど……

たか子。階上の二年にゐる、音無しい、可愛い顔した子ぢやアありません？

高桑。えゝ、さう……

たか子。ぢやアさうだわ。——藤木おゆきちゃんですわ。

高桑。あの子、活人畫に出てくれないでせうかね？

たか子。活人畫の何に？

高桑。二つあるんです、趣向が。——どつちでもいゝんです。——一つは太田道灌の、七重八重花は咲けども山吹の。——一つは五條の橋、辨慶と牛若……

たか子。あの子は、あれで、踊もならつてるんですわ。

高桑。(念を押すやうに) さうでせう？——(わが意をえたやうに) だらうと思つたんだ……

たか子。(やゝ嫉妬に似たものを感じて) 眼が早いのね、しかし……

高桑。な、なぜです？

たか子。いつめつけたの、あの子を？

高桑。それア、もう……(いひかけて立直る) だが、どうでせう？——出てくれるでせうか？

たか子。先生からいつてもらつたら出るでせう。

高桑。(眉を擧めるやうに) 先生から？

たか子。先生もあの子が好きなのよ。——懶巧もんだから、あの子、外のことでなし、學校のためだから。——先生からさうでもいはしたら嫌とはいはないでせう……

高桑。ぢやアたのんで下さいな。——さういつて先生にたのんで下さいな。

たか子。あら、あたしから？

高桑。此方からそれアいつてもいゝけれど、此方からいつて、もし、それアこまる。——さうでもいはれたら、あなた……

たか子。そんなことをいふわけありませんわ。

高桑。いゝえ、いひます。——必といひます。——さうまでいはなくつても必と何とかいひます。

たか子。さうかしら？

高桑。へんですよ、先生。——何だか角かどがあります、われわれに。——(佐々木に) さう思ふだらう、君だつて？

佐々木。(たか子に) 僕たちのしてゐることがよく分らないんぢやアないんですか、先生に？  
たか子。(やゝ狼狽して) そんなことありませんわ、分つてますわ。



高桑。今度のことについて、だれより一番熱心でなくつちやアいけない先生が一番不熱心ですよ、しかし。——冷淡すぎますよ……

たか子。いゝえ、それは。——性分よ、それは。——いくらお肚中でうれしいと思つてもそれを顔にだつて出せないのよ、先生は。——だから、なほのこと口に出して……

高桑。いゝえ、それア知つてます。——知つてますけど……

たか子。それには、こゝんところ、峰さんのことなんかあつていろくごたくしたんでせう。——それでいくらか機嫌も悪いんです。——だから、そんな……

高桑。張合がありませんよ、しかし……

たか子。いゝえ、張合がないといへば、峰さんの止したことであつたしにはこれツばかりもいはないんですものね。——月曜にも来ない、火曜にも来ない。——いつにも休んだことのない人が可笑しいと思つて訊くと、うむ、峰君はうちを止した。——あたしのはうからさういはなかつたら、新しい先生が来たつてあたしには何ともいはないつもりだつたんですよ。——一しよのうちにたつてさうですもの。——たいていそれア嫌になるわ……(さういつて密とうしろをふり返る)

途端に、岩田、いそいで入つて来る。

岩田。遅くなつた、すまない、すまない……

高桑。何をしてゐるんだな?——三時つて約束ぢやアないか……

岩田。だからすまないつていつてるぢやアないか。——ぐずぐずいふなよ……

高桑。でも、君が早く来てくれなければ、プログラムのきまりがいつまでもつかないんぢやアな  
スカ……

岩田。此方だつて、いままで、そのために方々あるいて来たんぢやアないか。——相手は藝人だ、

さうく思つたやうに右から左へ話のきめて来られるもんぢやアねえ……

高桑。ぢやア、ちやんと、話はきめて来たんだな?

岩田。きめて来たか来ねえかはツきり聞いてみたらいゝだらう……

高桑。(急にいんぎんに)ど、どうぞ。——どうぞこちらへ……

岩田。(つんとした感じに)ふさけるねえ……

高桑。(岩田のそばへよつて)すまなかつた。——すまなかつた、兄哥。——腹も立たうが、まア、堪忍してくんねえ……

岩田。うるせえな。——(たか子に)今日はしかしいゝ天気ですよ、外は。——風はなし、あつた  
かだし、あるくには持つて来いの日だ……

たか子。かういふ日どツか遠くへ遊びに行つたらいゝでせうね。



佐々木。(歎息するやうに)これなら今日、寫生に行けばよかつたなア。——よッぽど、先刻、さう思つただけど……

高桑。これからは、もう、かういふ天氣はザラだ。——秋空晴れて氣は清く、だ。——會がすんだら、一日、みんなで慰勞會の代りにどツかへ遠足しようか?

岩田。うん、それはいい。——家の中で茶話會をやつたつてつまらない。——(たか子に)さうしたら一しよに行きませんか?

たか子。行きますわ。——さそつてさへくれれば行きますわ。

岩田。あなたが行けば外の人たちだつて行くでせう?

たか子。それア行きますわ。——お久さんだつて、おあきちゃんだつて、喜んで行きますわ……

高桑。(わらつて)必と、それだと、先生から槍が出るから……

たか子。あら、どうして?——だつて大ぜいで行くんでせう?

岩田。關係者みんなで……

たか子。そんなら構はないぢやアありませんか?——何かいつたら一しよに連れて行けばいいぢやアありませんか?

佐々木。鴻の臺がいゝな、行くんなら……

岩田。鴻の臺?——下らないぢやアないか、あんなとこ……

佐々木。でも里見公園から江戸川をわたつて柴又へ出れば。——あの渡船わたぶねへ乗るだけだつてい

S……

岩田。それより井の頭がいゝ。——飯田町から汽車で吉祥寺といふ停車場で下りればいゝんださ

うだ。——大きな池があつてとても素敵ださうだ……

たか子。それより西新井の大師さまになさいよ。——あたし、まだ、知らないんだから……

佐々木。あすこゝそ厄年の人の行くところですよ。

たか子。來年、あたし、厄ですわ。

高桑。(わざと頓狂に)來年厄ですつて?

たか子。えゝ。

高桑。と、來々年きらいねん三十ですか?

たか子。酷いわ、高桑さん。——いくらあたしがお婆さんだつて三十にはまだ間があるわ。

高桑。だつて、女の厄は十九のあとは二十九でせう?

たか子。あらさう?——あたし二十五よ、來年……

高桑。二十五は男の厄ですよ。



たか子。男の？——ぢやア、あたし、間違へてゐたわ。  
佐々木。暢氣だなア、たか子さんは……(わらふ)

たか子。あら、暢氣ぢやアないわ。——これだつて、あたし……

高桑。(遮るやうに) さ、商賣々々。(いそがしくまた鉛筆をとり上げて、——岩田に) と、君、しん馬は  
いゝんだね？

岩田。さういふお目出度い會なら喜んでうかどひます。——さういつた……

高桑。で、演るものは？

岩田。「千早ふる」なんかといゝだらうといつてゐた……

高桑。……からくれないに水くどるとは、か。——いゝだらう、あれなら……(書入れる)——講  
談は？

岩田。右龍をつれて来るやうにたのんで来た。——彼奴なら間違ひがないから……

高桑。何を演る？

岩田。彼奴なら義士傳にきまつてゐる。

高桑。よし、義士傳……(書入れる)——琵琶は？

岩田。さ、それなんだ。——昨夜も今日も行つたんだが錦水の奴うちにゐないんだ。——仕方が

いから、矢つ張、錦葉で間に合せることにした。——その代り彼奴ならほんとの車代でいゝ……  
佐々木。可哀想に……

岩田。だつて、彼奴なんか、片つ方に豆腐屋といふちやんとした商賣をもつてゐるんぢやアない  
か。

高桑。何を演らせる？

岩田。「常陸丸」がいゝと思ふんだ。——でなければ「城山」……

高桑。それは「常陸丸」の方がいゝ。——「常陸丸」にしよう……(書入れる。——大きな聲で) 出  
來たア……

岩田。みせてくれ、一寸……

高桑。あとは大寺小學校創立二十年祝賀會つてことをどこへ入れるかだけが問題だ……(といひな  
がら原稿を岩田にわたす)

たか子。(しみじみ感心するやうに) へんだわねえ、しかし……

高桑。何がです？

たか子。どうして、あんた方、そんなによく藝人のことなんぞ知つてゐらつしやるの？

高桑。それア知つてゐますよ。——岩田なんか並木亭の定連ですもの……



「……どうも、それは、お忙しいところを」「いゝえ、とんだことを」「さうした報酬をしながら、眼鏡をかけた校長をさきに、岩井屋、入つて来る。

校長。(誰にといふことなく) 岩井屋さんがみえた……

岩井屋。(校長のうしろから愛想よく高桑に) 昨晚は……

高桑。あゝ昨晚は……

岩井屋。(佐々木と岩田に) みなさん、御苦勞さまでございます。——遅刻いたしましたして……

佐々木。

岩田。いゝえ……(頭を下げる)

高桑。片倉さんは?

岩井屋。すぐにまゐります。——いま寄りましたらちやうど客で……(この間でたか子にも目禮する)

岩田。プログラムが出来ました(岩井屋にわたす)

岩井屋。あゝ左様で (うけとる)

高桑。いま出来たばかり。——先生にもまだお目かけないんです……

岩井屋。どうぞ、では、先生から……(校長へそのまゝまはさうとする)

校長。いや、わたくしは。——どうぞ。——どうぞまアおさきへ……(押返す)

岩井屋。左様ですか? ——では……(みる) ——お骨折で、これは、大へんにぎやかに。——落語、

講談、琵琶、三曲合奏。——よくこれだけお揃へになりましたなア……

高桑。その中へ、もう一つ手品を入れたいと思つたんですが……

岩井屋。いゝえ、これで十分です。——外に、まだ、あとへ行つて活人畫もあれば喜劇もあるんですか

ら。——これだけでも三十錢ちや安すぎます……(さういひながら校長へそれをわたす) おさきへ……

校長。いや……(うけとつてみる。——やゝしばらく無言。——顔を上げる) しまひのこの喜劇といふ

のは、これは? ——矢つ張これは商賣人を……?

岩田。いゝえ、さうぢやアないんです。——僕たちがやるんです……

校長。……? (おもはず岩田の顔をみる)

岩田。僕と、佐々木と、今日は来てゐませんが勝と。——で、佐々木が女形をやります……

校長。……(何かいはうとして止す。——暗然とした感じに眼鏡をとつて下に置く)

問。(……高桑、佐々木、岩井屋の三人、はつきりその感じをみてとる。——密と呼吸をのむ。——

——岩田とたか子はそれにあづからない)

たか子。(いつそ燥いだ感じに) ねえ、あの、藤木のおゆきちゃん。——あの子を活人畫に出したいと高

桑さんたちがいふんですけど。——出てくれますわね、さういへば……



校長。……………

四二八

たか子。(高桑に)「太田道灌」のはうをあたしいと思ひますわ。——あれなら、あの、女のはうを  
するんでせう?

高桑。(外らすやうに)え、まア……

たか子。先生がさういつたとあたしからいひませうか?——それで好ければ、あたし、今夜でも……

校長。(全くの不機嫌で)馬鹿なこといつちやアいけない……

たか子。え、? (肯へないやうに)

校長。あすこのうちにはいま病人があるんぢやアないか。——あの子の姉がずつと寝たつきりに  
なつてゐるんぢやアないか。——知らないのか、お前……?

たか子。(不足らしく)知つてますわ、それは。——おしさんの悪いことはよく知つてゐますわ。……

校長。知つてたら、お前。——その最中へそんな暢氣らしい……

たか子。……………

校長。先方の料簡にもなつてみなさい。——でなくつても、町内で、堅いでとほつてゐるあのう  
ちぢやアないか……

たか子。……………

校長。そんな無暗なことをして、お前……

たか子。(遮る)もう好ござんす、——分りました……(ふくれる)

間。

校長。高桑君、聞いてのとほりのわけだ。——もしおゆきでなければいけないのならどうだらう、  
それだけみ合せにしたら。——外にいろくあるんだから……(結句弱つ氣にやゝいひよどむ)

高桑。え、構ひません、止ませう。——どうせいろどりに入れたんですから……

高桑。さういふなり手を伸して校長のまへのプログラムの原稿を自分のはうにとる。——活人畫と

ある部分だけ鉛筆でキビく抹消する……

そのまゝあたり白け返る。

……誰も無言。

やゝ長き間。

片倉、入つて来る。

片倉。(極めて元氣よく)遅くなりまして……

校長。(ふり返る)いや……

——あとのものはたゞ目禮するだけ。——片倉、ふと、拍子ぬけのした感じ。——すぐあたりの白



四三〇  
けた空気を感じて上げも下げもならない心もちになる。  
窓の外にいつかつめたく消えた灰いろの日ざし。  
たか子、急にそこを出て行く……(幕)

### 第三幕

大寺學校の教場。(階上。——第一幕第一場と同じ)

十一月中旬。(前まくの半月あまりあと)大寺學校創立二十年祝賀會の當日。——休憩室にあてられたそこは、上り口だけ残し、あとの部分すべて紅白の幕でつままれる。萬國旗や提灯の蜘蛛手に張りわたされた下に、急ごしらへの、机を長方形にならべて白い布をかけた食卓がいくつも用意されてある。勿論、そのうへも、季節をおもはせる菊やみぢの造りばなで飾られてゐる。——賣店案内の、佐々木たちの描いたとおぼしい種々の漫畫がところ嫌はず貼り散らされてあり、そろひの赤い釋をかけ、賣店係のしるしの青いリボンを胸につけた、お久、おあき、おくめ、おたまたち、絶えず幕のかけを出たり入つたりする。……

午後二時前後。——うちのなかのしかく陽氣なのに引かへ、戸外は、陰氣に冷めたく曇つてゐる。

——階下の會場では、いま生徒たちによる「君が代」の合唱だの發起人の挨拶だのがすんで校長の謝辭とまで番組のすんだところである——幕のあいたとき舞臺に、おくめとおたまとが食卓に茶碗をならべてまはつてゐる以外だれもそこにゐない。

間。



餘興係のしるしの赤いリボンをつけた高桑をさきに、しん馬、階下から上つて来る

高桑。岩田、いま、ちぎに來ます。——ここですこしお待ちなすつて……

しん馬。(落語家らしい舉止で)有難う存じます。——いえ、おそれ入ります……

……しん馬、眞ん中の食卓のまへに腰を下ろす。——もの珍しげにあたりをみまはしながら煙草入を出しかける。

高桑。(おくめに)おい、君、お客さまだよ。

おくめ。あら、だめですわ、まだ。——いま、まだ、支度してゐる最中ですわ。

高桑。何だ、まだそんなことをしてゐるのか？

おくめ。だつて……

高桑。ぐづくしてゐたら、君、駄目だぜ。

おくめ。でも、三時でせう、休憩は？

高桑。休憩はさうさ。——休憩はさうでも、お客さまは、そのまへだつてずん／＼來るぜ。

おくめ。(ピツクリしたやうに)あら、さうですか？——(うしろをふり返つて)ねえ、休憩にならなくなつてもお客さま來るんですとさ。——困るわねえ……

幕のかけでそれにはこたへるが聞えない。

おくめ。え？——あゝさう……(高桑のはうを向いて)甘酒なら出來ましたつて……

高桑。いゝや、甘酒でも。——持つて來給へ。

おくめ。二つですか？

高桑。二つ。

おくめ、幕のかけに入る。

高桑。(しん馬に)右龍さんは？

しん馬。もうまゐります。——遅くも二時までには必ず伺ふと申してをりましたから……(といひながら時計を出して)おや、これはもう二時まはりました……

高桑。いゝえ、來てさへ下されば。——時間は、まだ……

しん馬。それは。——それは、もう、決して。——まゐることは必ずまゐります……

おくめ、盆にのせて甘酒を持つて來る。

おくめ。お待ち遠さま……(高桑のまへに置く)

高桑。(しん馬に一つとつて)いかゞです、一つ……？

しん馬。(持つた煙草を下に置いて)へえ、これは。——これはおそれ入ります。——頂戴いたします……



高 桑。(一口飲んで)うん、思つたよりこれはうまいや。

おくめ。(うしろを向いて)思つたよりうまござんすつて……

おあき。(幕のかげから顔を出して)よかつたらどうぞお代りを……(すぐ引つ込む)

おくめ、おたまと二人、高桑たちと關係なく、そのまま適宜のところに腰をかける。

しん馬。しかし。——甘酒とはしかし御趣向で……

高 桑。いゝえ、もと／＼珈琲のつもりだつたんですが、珈琲よりこの方がこゝのお客には受けるだらうといふんで……

しん馬。それはうけます。——それはこの方がうけます。——矢つ張しかし、こちらの生徒さん方が？(おくめのはうへこなし)

高 桑。いゝえ、これは、學校でも裁縫のはうの人たちで……

しん馬。裁縫の？……

高 桑。校長の姪になる人がべつに弟子をとつて裁縫の稽古をしてゐるんで……

しん馬。あゝ左様で。——しかし、こちらは、先日岩田さんにもうかどひましたが、大へんお古い……

高 桑。えゝ、それはこの近所にも、宮部だの、紅雲だの、おんなしやうな學校がいくつもありますが、古いことではどこもこの學校にかなひません。

しん馬。さうでございませうとも。——二十年といへば、あなた。——いまから二十年まへなら憲

法發布の……

高 桑。(うなづいて)憲法發布の年の秋にそも／＼はじめたんださうです、この學校を。——それまでも、このさきの町内で寺小屋のやうなものをやつてゐたんだといひますから、ほんといふと二十年よりもつとになるわけです。

しん馬。(しみじみ)お大抵ぢやアございせんア、しかし……

高 桑。ですから、まア、われ／＼もおセツかいをしてかうした會をやることにもなつたんです  
が……

しん馬。(うなづいて)結構でございます。——全く結構なお催しでございます。——校長先生になすつてもどんなにお喜びか……

高 桑。ビツクリしたらうと思ひます。——お前たちに何が出来るといつた風に、いくら此方が骨を折つても、肝心の校長は昨日までちつとも氣乗をしてくれないんです。——何を相談かけても親身になつてくれません。——何度腹を立てゝ止さうと思つたか知れませんが……

しん馬。いえ、まア、それは。——矢つ張りそれは大事をおとりになるんで。——御存じでございませうか、あの、山谷の河本學校といふ學校を。——矢つ張こちらのやうな……？



高 桑。え、知つてゐます。——あれは、また、こゝよりも古い、曰くのある、——たしか、あすこの校長、東京市から褒美か何かもらつたんぢやアありませんか？

しん馬。さうでございます。——その御褒美を頂戴したとき、——そのときの矢つ張かうしたお祝のお催しのあつたとき、尤もこれは今日のやうな多勢さんぢやアございませませんが、お招きをいただいてわたくしお饒舌にうかどひました。——そのときその校長先生のなすつた御挨拶。——立派な、かう、長い髻をお生しになつた、みるからむづかしい顔をなすつた方でしたが、自分はいま、でついぞ心から笑つたといふことがなかつた。しかし今日といふ今日は、心から、しんから底から笑ふことが出来る。——みんなそれもみなさんのお蔭だ。——いま、で長い間の苦勞も今日のこのうれしさにくらべれば何の事でもない。——何といつて自分はお禮をいつていゝか分らない。——涙を翻さないばかりにさう被仰いましたが、蔭でうかどつてをつてわたくし、なるほどさうだらうなア、さうしたものだらうなア。——つくづくわたくしさう思ひましたが……

高 桑。それは、まア、うちの校長でも、腹ん中ぢやアすつかりうれしがつてゐるに違ひないんです。——

しん馬。あとでこれはうかどひしましたが、そのお祝ひをしほに、自分もとる年だ、いつまでも自分のやうなもの、頑張つてゐる時勢ぢやアない。——さう被仰つて、それから間もなく、すつぱり

その學校をお止めになつたさうですが……

高 桑。(意外なやうに)あ、さうですか、あすこ？

しん馬。いゝえ、可笑しいのはそれで、學校をそのお止めになると一しよに碁象戲の會所をおはじめになつたさうですが、もしほんたうとすると、これ、意氣な、思ひきりのいゝ……

高 桑。さきをくどつたんです。——先手をうつたんです、それは。——とても、このさき、代用學校の立ち行くわけのないのをはつきりみ越したんです、それは……

しん馬。左様ですかな？

高 桑。それは、もう、このごろのやうに公立のいゝ學校がどん／＼出來たら代用學校の立つ瀬はありません。——(やゝ聲を潜めて)こゝなんぞでも、近所にまだそれがないからいゝんですけれど、いまに市區改正でもすつかり出來て、どこかに一つそれが建てば一トたまりもありません。

しん馬。(わらつて)そんなことも……

高 桑。いゝえ、さうです。——さうなんです。——さうなるにきまつてゐるんです。

しん馬。………

高 桑。だからすこし目端のきく校長ならいまのうちから用心してかゝります。——さうしなければ足搔のつかないものが出來ます。——が、こゝの校長にはそれが分りません。——そんなこと



になるなんぞとは夢にも思つてみません。——それは世間にうといんですから……（ふだんの反感がわけもなく言葉にあらはれる——勿論、その場合、縁もゆかりもない相手といふことを漸次わすれて来てゐる）

しん馬。……………

高桑。いざとなつたつて、だから、こゝの校長には碁會所なんぞはじめる智慧は出やアしません。——その半分ものが分つてれば大したもんです……

岩田をさきに、岩井屋、このとき急いで階下から上つて来る。（……岩田は、高桑と同じ餘興係のしるしの赤いリボン、岩井屋は、接待係のしるしの白いリボンを胸につけてゐる）

岩田。（高桑にいきなり）おい、どうするつもりなんだ？——いつまであんなものをやらして置けばいゝんだ？

高桑。（不意を喰つたかたち）何？——何を……？

岩田。（ぶん／＼して）何をつて、君、あんな下らない。——あんな下らない、愚にもつかないことをいつまで饒舌らして置けばいゝんだ。——今日は、君、いつもの紀元節や天長節ぢやアないんだぜ。——いつもの子供たちばかりの相手ぢやアないんだぜ。

高桑。（腑に落ちないやうに）だつて、君……？

岩田。だつて君ぢやアないよ。——そんな落着いて、どうするんだ。——はじめツからあんなに客をだらしてしまつてどう方返しほうがへをつけるんだ？

岩井屋。（幾分とりなすやうに）いえ、それといふのが、校長すつかり上つてしまつたんで。——たゞもうわく／＼してしまつた證據には、いつもあんな、一つことを幾度もいつたり、さきにいふことを後からいつたり。——めつたにあんなことはないんですが……

高桑。（急に色を作して）まだ饒舌つてるんですか、校長？

岩井屋。さうなんです。

岩田。それをいつてるんぢやアないか。——それをさういつてるんぢやないか。——もう、君、三十分の餘にもなるんだぜ。

高桑。そんなはずぢやアなかつた。——時間は切詰きつめですから出来るだけ簡単に。——たか／＼十分か十五分で。——今日も、先刻、出るまへに俺はハツキリさういつたんだ。——だから安心してゐたんだ。——疾うにもうそれはすんで會計報告にでもなつてるんだらうと思つてゐたんだ。

岩田。思つてゐたつてさうなつてゐなきやア仕様がなないぢやアないか……

岩井屋。（高桑に）だから、いかゞです、會計報告は止してすぐ餘興にお入りになつたら？

岩田。さうでもしなかつた日には、君……



高桑。(それにはこたへず岩井屋に) それは構ひません。——われ／＼はちツとも構ひませんが、もと／＼それをしろといったのは校長です。——それをいひ出したのは校長です……

岩井屋。ですから、それは、片倉とわたくしとで責任を負ひます。——責任を負つて、あとで、刷物にでもなんでもして配ります。

高桑。それでいゝんです。——どこの何の會だつてみんなさうするんです。——今日の會の收支を今日すぐ報告する。——どだいそんな器用なことの出来るわけがないぢやありませんか……

岩井屋。(わらつて) それは、もう……

高桑。でも、強情に飽くまでさういふものだし、あんまり先方のいふことを蹴散らしてばかりゐるものと思つて、格別邪魔にもならないから、まアいゝとプログラムに入れて置いたんです。——しかしかういふことになる……

岩田。さうでなくつてもはじまりが十何分遅れてゐるんだ。

高桑。よし、構はない。濟みしだいすぐ餘興へ行かう。——ぐづ／＼いつたらあなたが悪いんぢやアないかといつてやる……

岩井屋。(わらつて、また) 何としても堅い方ですから……

高桑。堅いつていふんぢやアありません、氣が小さいんです。——料簡がケチなんです……

岩田。(ぢれツたさうに) どうだつていゝぢやアないか、そんなこと。——それより、君、餘興だ。——プログラムの順だと講談だけど、このあとすぐ講談ぢやアまるで氣が變らないぜ。お客はうだるばかりだぜ。——いつそ、どうだ、落語にふりかへちやア……

高桑。それはさうだ。——そのほうがいゝ……

岩田。しん馬さん、君、さうしてくれないか？

しん馬。へえ、わたくしはもうどちらでも……

岩田。右龍さんもう來てゐるけど……

しん馬。あ、まゐりましたか、右龍？

岩田。來た。

しん馬。どちらにをります？

岩田。階下したにゐる。

しん馬。さうでございますか。

岩田。で、君、氣の毒だけれど、聞いてのとほりのわけだ、うんと一つ馬力をかけてくれ給へ。

——思ひきりわつといはせてくれ給へ。  
しん馬。かしこまりました。



岩田。短くつていゝ。——時間は短くつていゝから……

途端、階下に、拍手の音起る……

高桑。(急に) すんだ!

岩田。(しん馬に) ちやア、君……(立上る)

しん馬。へえ……(狼狽て、煙草入をしまひかける)

高桑。おねがひします。

しん馬。よろしうございます。(立つ)

岩田をさきに、しん馬、いそいで階下へ下りて行く。——高桑も立つて上り口のあたりまで行く。

間。

急にまた階下に拍手の音起る。(まへのよりにぎやかな感じの)——つゞいてどつと笑ひ立てる聲。

高桑、もとの位置にかへつて来る。

高桑。どうです、岩井屋さん、甘酒あがりませんか?

岩井屋。出来ましたか、もう?

高桑。出来ました。——いま一杯飲んでみましたか思つたよりうまいんです。

岩井屋。では、一つ、頂戴ませうか。

高桑。(おくめの方をふり返つて) お代りだ、甘酒……

おくめ、おたまと綾取をしてゐたのを止してすぐ立つ。——幕のかけへ入る。

岩井屋。しかしよく行きました。——これだけに行かうとは思ひませんでした……(やゝホツとした

といった感じにさういひながらふところから帳面だの鉛筆だのをつかみ出す)

高桑。(ともく) 安心しました、しかし。——前景氣がいゝといふので樂觀はしてゐましたけれ

ど……

岩井屋。いゝえ、それが。——間際になつてそれがすっかり引ツくり返りました。——これはと思

ひました。——(わらつて) いまだからお話しますけれど……

高桑。それは、また……?

岩井屋。いゝえ、つまりは此方が多寡をくゝりすぎたので。——發起人になつてもらひにはうゝ

あるいたとき、それ〴〵體のいゝことをはうゝでいはれたのを正直にうけとつたのがいけな

つたんです。——いざプログラムが出来て、改めてまた切符を賣りにまはると、五枚や十枚だま

つて引取つてくれるはずのところ、一枚か二枚しか買つてくれず、義理にも一枚は買つてくれる

と思つたところで、やれ忙しいからの、生憎その日は都合が悪いからの。——どこへ行つても、

これ、ケンもホロロです……



高桑。さうですかア……

岩井屋。これではいけないと、そこで片倉と相談して、今度は構はず、手近の、懇意なところばかり選つて無理押付けに押付けてあるきました。——(わらつて)野上のところへ行つたのなんぞやや強談のかたちがありました。

高桑。野上といふとあの「魚吉」の……?

岩井屋。さうです……

おくめ、甘酒をもつて来る。

おくめ。お待ち遠さま……

高桑。……(うけとる)

おくめ。お團子かカステラあがりませんか?

高桑。お團子かカステラ?——それならいつそお煎餅のほうがいゝ。

おくめ。まだ来ないんですよ、お煎餅……

高桑。どうして?

おくめ。一時までに持つて来るつもりのが来ないんで、お師匠さん、自分でいま催促に行きましたわ。

高桑。どこの煎餅や!

おくめ。横町の八ツ橋煎餅……

高桑。ぢやアいゝや、まア……

おくめ。さうですか?

おくめ、高桑のそばを離れる。

高桑。(岩井屋に)で、「魚吉」へおいでになつて……?

岩井屋。お前のところで二十枚や三十枚引うけないつてことはない、さういつて片倉と一ト晩すわりこみました。——あすこの弟の伊之ちゃんとは、いつかも申したとほり、われ／＼おんなじ卒業でした。——それは發起人を断つた手前からいつてもその位なことをするのは至當だ。——發起人にもならない、切符も買はない。——どういふ事情があるか知らないが——よしどういふ事情があるにしても、それはそれ、これはこれ、いま／＼の長い間の関係からいつても、お前のところで今度のこと知らない顔であるつて法はない。——それぢやア義理に缺ける。——高飛車に一つかういひました……

高桑。しかし、どの位あの峰さんの事件が……?

岩井屋。さ、それをあなたにくはしく伺ひましたからそのつもりでやりました。——はじめは、さ



きも、白ばツくれてをりましたが、しまひに此方で切出したもんで、實はそれもある。——心も  
ちを悪くしてゐることをハツキリ白状しました……

高 桑。しかし、あれは、峰さんが學校を止したんでもう解決がついたと思ひますけど。——先方  
の顔はそれでもう十分立つてると思ひますけど……

岩井屋。ですから、いゝえ、そんなことをいつまで根にもつてやアしない。——あとで言譯のやう  
にさういつてゐました。——そんなことよりもまた外にいろ／＼ある。——いろ／＼纏れがある。  
——が、そんなことで今度のこと骨を折らないんぢやアない。——發起人を斷つたのも、顔出  
し一つしないのも、それはいま、うちに少しごた／＼したことがあつて、それで義理を悪くする  
やうなことになつてゐるんだ。——全く抜けられないことがあつて手傳へないんだから悪く思は  
ないでくれ。——その代り切符は買ふ。——いくらでも買ふ……

高 桑。大へん、しかし音無しく……

岩井屋。稼業柄野上のうちのものは、鼻つ張はみんな強いんですけど、そのつもりで此方が話を持  
つて行けば決してそんな分らないことはいひません。——いつまで強情は張りません……

高 桑。矢つ張ね……

岩井屋。しかし片倉はあゝいふ性分ですから、それでも構はず突ツこみます。——何とも思つてな

いものが、そんならなせ、そのとき以來妹を學校へ行かせないんだ。——おだやかでないぢやア  
ないか……？

高 桑。困つたでせう、さういはれちやア……

岩井屋。いや、それは、當人がいやだといふもんだからついずる／＼に休ましてしまつたんだ。——  
——決してそれは俺たちの指金ぢやアない。——さういひました。——自分からさういふのが可笑  
しいとあとで片倉とわらひましたが……(わらふ)

高 桑。(ともにわらつて) それは……

岩井屋。で、それからそれ、いろ／＼話して行くうちかういふことをいひました。——實は、今度、  
俺のところも外へ普請することになつた……

高 桑。普請？

岩井屋。どこへといふと、それはまだハツキリいへないが、こゝよりもつと廣小路に近くなること  
だけはたしかだ。——さういひます。——ぢやアこの店はいふと、こゝぢやア稼業の足搔はわ  
るし、それには今年一杯しかこゝにはゐられないんだ……

高 桑。と、矢つ張あすこも取拂ひに……？

岩井屋。しかしあすこは市區改正にはまるつきり關係のないところなんで。——それはあすこの地



面一ト曲輪は、以前仲町の伊勢喜といふ質屋の持つてゐたのを、四五年まへ、野上のうちのどん  
どん伸すさかりに買ったものです。——ですからあすこは自分地面。——自分で手離しでもしな  
いかぎりそんな取拂はれるなんてわけはありません……

高桑。……(うなづく)

岩井屋。妙なことをいふと思つて、歸つてそれを宅の親父に話しました。——と、宅の親父は知つ  
て、あゝそれは市との間の話がついたんだ。——市ぢやア疾うからあすこをほしがつてゐたんだ  
が、なかなか片つ方がうんといはなかつたんだ。——これでまた「魚吉」は一ト身上こしらへた……

高桑。……

岩井屋。市ではあすこをつぶして何か大きなものを建てるつもりがあるらしいんださうです。——  
それが電話局といふうはさもあれば、學校といふうはさもあるんださうですが……

高桑。學校だと……?

岩井屋。むろん小學校。——何としても、あなた、馬道まで行かなければ、このへんには情ないこ  
とに公立といふものがどこにもまだないんですから……

高桑。ぢやアそれは。——必とそれはさうです。

岩井屋。………?

高桑。何か、いゝえ、そんな氣がします……

岩井屋。(うなづいて)電話局といふのはそれは。——いゝえ「淺草」といふ局の將來出来るといふこ  
とは聞いてをりますが、でもそれは、出来るにしてもずつとまだあとのことだらうと思ひます。

——とてもまだ來年や來々年のことぢやアあるまいと思ひます……

高桑。………

岩井屋。だとすれば。——どうも、これ、學校といふうはさのはうがほんたうのやうに思はれます。

——(やゝ聲を低くして)だが、高桑さん……

高桑。………

岩井屋。もし、しかし、さうなると。——さうなるとこの學校は……?

高桑。さ、それです。

岩井屋。野上のうちとこゝぢやア眼と鼻の。——ほんたうの、あなた。——あんまり近すぎます……

高桑。それなんです。

岩井屋。あんなところに出來られたら、とてもこの學校の立つて行ける瀬はありません。

高桑。實は、いゝえ、いまもしん馬と、山谷の河本學校の話をしてさういつてたんですが。——  
とてもう私立は。——どうしたつて、もう、かうした工合になつたら……



岩井屋。時勢で、まア、それも仕方がないといふもの。——さうなるとしかし校長が……

高 桑。知らないと思ひます、校長は……

岩井屋。知らない？

高 桑。いゝえ、それにまだ気がつかないと思ひます。——そんなことになるとは夢にもおもはな  
いと思ひます……

岩井屋。(背へるやうなうべなへないやうな)さうでせうか？

高 桑。でなければ。——でなければあんなノホ、ンでゐられるわけがないと思ひます。

岩井屋。ノホ、ンでね？

高 桑。ノホ、ンといつてわかるければあんな平氣で……

岩井屋。………

高 桑。でなければ、岩井屋さん、もつとわれ／＼に。——今度のこのことでも、つとわれ／＼にい  
い顔をみせるわけだと思ひます。——みせなくつちやアうそだと思ひます。——まるで、あんな、  
木で鼻をくゝるやうな、——あんなつて法はないと思ひます……

岩井屋。が、まア、それは。——よくそれはあなたでも、岩田さんでも、佐々木さんでも、みなさ  
んこゝまで我慢なすつたと思ひます。——みなさんなればこそです……

高 桑。ばか／＼しい、誰のためにこんな骨を折るんだ。——さう思つて、途中で、何度止さうと  
思つたか知れませんか。——いまだから矢つ張ひひますけど……

岩井屋。御尤もです……(あいそよくうなづく)

高 桑。が、止したらそれつきりです。——折角そこまで運んだことが水の泡になります。——そ  
れには周圍はたでいろ／＼いつてくれます。——何をいつてもつまりは相手にしなければいゝんだ。

——さう思つて、しまひには、此方だけでかまはずどん／＼やりました。——氣に入らなさうだ  
からいつそ止めようかといつた喜劇も、いゝからやツてしまへ。——さういつて、わざと、校長  
に分るやうに大びらに稽古しました……

岩井屋。おかげです。——全くみなさんの御丹精のおかげです……

高 桑。いゝえ、そんなことはありませんけど……

岩井屋。これで、われ／＼も、肩の荷が下りました。——いえ、實際……

……このとき、階下に、くづれるやうな笑ひ立てる聲一トきは高く聞える。

岩井屋。大分うけるやうですな……

高 桑。さうのやうです。

二人、階下へこなし。——片倉、岩井屋と同じ接待係のしるしのリボンを胸につけていそいで上つ



て来る……

四五二

片倉。ねえ高桑さん……(さういひかけて岩井屋に)何だ、君、こゝにゐたのか？——どこへ行つたかと思つて先刻から探してゐたんだ……

岩井屋。何か用か？

片倉。何か用かぢやアないよ。——階下ぢやア、みんな、受附の手が足りなくつて轉手古舞つてゐるんぢやアないか……

岩井屋。そんなわけはないぢやアないか。——受附はもう疾うに……

片倉。しまふつもりがそれがしまへないんだ。——どん／＼あとから突ツかけて来るんだ。

岩井屋。まだ？

片倉。まだ！——それもどこをどうまはつた切符かいろんな人間が来る。——始終公園をほつつきあるいてるやうな學生も来れば、近所のいろんな老人としよりなんかも来る。——いままも雑賀屋さいがの隠居が杖を突ツばつてノコ／＼やつて来た……

岩井屋。あゝ、あの隠居は、何でもみたり聞いたりすることが好きなんだ。

片倉。道理で茶番はもうすんだかと訊いてゐた。

岩井屋。茶番はよかつた……

高桑。……(苦笑する)

片倉。ところで、高桑さん。——こゝですぐに休憩にしてくれませんか？

高桑。こゝで？

片倉。早くつても、さうしてもらはないと、會場の整理がつかまません。——あとから来たものはみんな後うしろに立つてなければなりません……

高桑。あゝ、それは……

片倉。だから、一つ、こゝで休憩して、御順に前のはうへ詰めてもらへば、三十や五十らくにまだ入ります……

高桑。このあと講釋をいつそ琵琶にして、それで休憩にしようと思つたんですが。——止むをえませんが、さういふことなら。——思ひ切つてさうしませう……

片倉。さうして下さい。——たのみます……

岩井屋。ぢやア岩田さんに早くさういはないと……

高桑。さうです、支度するといけません……

片倉。ぢやア、すぐ行つてさういひませう。——(岩井屋に)来いよ、君も……

岩井屋。うん……(立上る)



高桑。行きませう、僕も……(ともしく立上る)

片倉。さうですか？——ぢやア……

高桑。(おくめとおたまに)君たち、今度すぐ休憩だよ……

おくめ。

おまた。あら？ (立上る)

高桑。さういひ給へ、外の人たちに……

高桑、さういひながら、いそがしく、片倉、岩井屋のあとにつゞいて階下に下りる。

おくめ、おたま、いそいで幕のかけに入る。——すぐ、また、おあき、お久たちと一しよに出て来る。

おあき。……だつて？——ほんたう、それ？

おくめ。ほんたうですわ。——高桑さんがいまさういつたんですもの。——(おたまに)ねえ……

おたま。ええ。

おあき。だつて、まだ、お師匠さんも歸つて来ないのに。——(お久に)ねえ、どうしませう？

お久。(誰よりもあぐねて)どうしませうつて仕様がないちやアないの……

おあき。(やゝぢれつたさうに)おたまちゃん、一寸みて来てよ。

おたま。ええ？

おあき。階下へ行つてお師匠さんが歸つて来たかどうかみて来てよ。

おくめ。(口を出して)歸つて来ればすぐ来るでせう、こゝへ？

おあき。だから、みに行つてまだ歸つてゐなかつたら誰かに行つてもらふのよ、呼びに。——おた

まちゃん、早く行つて来て頂戴……

おたま。ええ。

おたま、急ぎ上り口のはうへ行く。——途端、階下に、急ぎのやうな拍手の音おこる。

おたま。あら……(おもはず立留る。——おあきたちのはうをふり返る)

おあき。しまつたのかしら？

……つゞいて休憩にうつつたのを感じさせる喧騒。——お久、おあき、おくめ、おたま、ほんやり立ちつくす。

間。

來會者ぞろ／＼階下からあがつて来る。——はじめは三人五人づゝ。——だん／＼その數をます。

——あがつて来ては、だれも、一寸立留つてあたりの光景をみまはし、それから擦つたさうにテールのはうへすゝむ。——お久たち、まご／＼する……



間。

たか子、そのなかを搔分けるやうに急いであがつて来る。——あとに煎餅やの店のもの従ふ。

おあき。(すぐみて救はれたやうに) お師匠さん……

たか子。(あたりにゐる大ぜいを十分意識に入れて)ほんとに仕様がないつたらありやアしない。——あんなにハッキリ時間をいつといたのにぐづくしてゐるんだもの。——あたしが行かなかつたらまだ出来やアしなかつた……

お久。

まア……

おあき。

たか子。(煎餅やの店の者に)こつちへ持つて来て頂戴……

煎餅屋。へえ……

たか子、幕のかげに入る。——來會者、ぞくぞく階下からあがつて来る。

間。

舞臺たちまち人でうづまる。誰がだれとも分らない。そのなかで甘酒を註文するもの、團子を註文するもの、煎餅を註文するもの。——たか子をはじめ、お久、おあき、おくめ、おたま、右に左にその間を縫つていそがしく立ちまはる。——といふことは、煙草のけむりの立迷ふなかに、いろい

ろの活聲、笑ひさゞめく聲、ほしいまゝに入りみだれる……

——帽子を歪めてかぶつたり、羽織の紐にリボンを結んだりした生利な中學生らしいトむれの、隅のはうのテーブルに陣取つたのがさうしたなかにあつてことさら傍若無人に振舞ふ。

中學生の一。(からかひ面に)ビールをくんないか、君……

おくめ。ビール?——ビールなんかありませんわ。

中學生の二。ビールがなければ熱い奴を……つていつたつてね。

中學生の三。(その尾について)おでんはないか、おでんは……

中學生の四。あれば俺は信田卷だ……

中學生の二。俺ア竹輪と雁擬きだ……

中學生の一。よせやい、共食するの……

たか子。(遠くから)おかどが違ひます。——こゝはおでんやぢやアありません……

中學生の五。おでんやぢやアないとよ。——間違へちやアいけねえ……

中學生の三。ぢやア何だ?

たか子。(怯まず)甘酒屋よ。——だから甘酒をあがれ。——おあきちゃん、こゝへ五人さん頂戴……

おあき。たゞいま……



このとき、上り口に、お酌のやうなげばくしい恰好をした女の生徒（はじめの幕に名まへの出た田宮のおてる）玉守の手を引つ張つて上つて来る——そのあとに、おゆき、つゝましく従ふ……

居合すものみんな上り口のはうをみる。

おてる。あら……（いやらしく嬌態<sup>てな</sup>をする。——甘ツたれるやうに玉守に）行きませうよ。——一ぱいだから行きませうよ、先生……

玉守。うん……

玉守、わざと中學生たちのはうをみず、そのまますぐ、おてるとおゆきをつれて階下に消える……

中學生の三。（おてるのいつた眞似をして）行きませうよ。——一ぱいだから行きませうよ、先生……  
居合すものみんなどつとわらふ……

中學生の二。何だい、彼奴？

中學生の三。誓願寺中にゐる田宮つて按摩の金貸のうちの奴なんだ。

中學生の二。按摩の金貸？

中學生の三。とても因業で大へんな奴なんだ。——とてもそれで吝嗇<sup>けち</sup>なんだ。

中學生の四。そんなうちの奴にみえないぢやアないか？

中學生の三。彼奴はお洒落なんだ。——お洒落で浮氣なんだ。——それでゐてあんな大きな體<sup>からだ</sup>をしな  
がらすぐ泣くんだ。——それア泣蟲なんだ。

中學生の二。よく知つてるんだな。

中學生の三。それは、彼奴、俺のいとこの奴のうちのまへを毎日のやうに通るんだ。——彼奴、その  
いとこの奴に惚れてゐやアがるんだ。——だからよく調戲<sup>からか</sup>つてやるんだ。

たか子、おあきからうけとつて人數だけの甘酒を中學生たちのまへに運ぶ。

たか子。お待ち遠さま。……（いひすてゝ、すぐ、外のテーブルのはうへ行く）

中學生の一。（み送つて）おほッ、あの姐さん、なか／＼気が強いよ。

中學生の三。馬鹿！——失禮なことをいふなよ。——姐さんぢやアない、奥さんだ……

中學生の二。奥さん？——どこの？

中學生の三。この學校のよ。

中學生の二。この學校の？——と、あの禿<sup>はげ</sup>のか……？

中學生の三。（わざと）大きな聲だすなよ、聞えるぢやアねえか。——ねえ、奥さん……

……みんなたか子のはうをみる。

たか子。（すまして指圖する）おたまちやん、あちらの方御勘定。——それからこゝへお茶をさして上



げて……

中學生たち、顔をみ合せてわらふ……

中學生の二。(わけもなく落語家の眞似をし出す)……それにつけても吉田の兼好。——寒からぬほどにみて置け峰の雪。——傾城につみなし、かよひ給ふまらうどにこそつみあれ……

階下に、そのとき、餘興のはじまる知らせの振鈴鳴る。——いそいでどのテーブルのものも立上る。

中學生の一。今度は何だ？

中學生の三。琵琶だ。

中學生の二。そのまへにまだ講釋が残つてゐる。

中學生の一。講釋なんぞつまらねえな……

大ぜい一しよに下りるので上り口しばらくごたつく。——そのなかにまじつて、中學生たち、いろいろわい／＼いふ……

間。

……急にあたり大風のふいたあとのやうになる。——たか子と、お久と、おくめと、おたまと、さうしていまゝで誰もそのゐることに氣のつかなかつた光長と峰と二人だけそこに残る……

お久。(たか子に)何でせう、あの人たち……？

たか子。墮落學生だよ、どツかの。——生意氣だつたらありやアしない……

おあき。あたし、みたことありますわ、あの人たちの顔。——始終この近所をうるついでる人たち

ですわ、必と……

お久。どうして來たんでせう、あんな人たち？

たか子。矢つ張り切符を買つて來たんだらうけど……

光長、前に出る……

光長。たか子さん……

たか子。(驚く) あら、先生。——いつ……？

光長。いえ、さきほどからをりましたんですが……(さびしく笑ふ)

たか子。あら、ちツとも存じませんでしたわ、あたし……

お久。

おあき。あら、あたしたちも……

光長。いえ、實は……

たか子。(おくめとおたまに)お前さんたち汚れたものをずん／＼あつちへ片付けて頂戴……

おくめ、おたま、返事をしてさうし出す。——お久もおあきもとも／＼手傳ふ……



光長。實は、その、思ひがけないお客さんが……

たか子。思ひがけない？

光長。へえ。

たか子。どなたですの？

峰、すゝみ出る。

峰。(固苦しく)その後は……

たか子。(ビツクリして)まア峰さん……(やゝ顔を染める)

お久も、おあきも、おくめも、おたまも、おもはずしかけたことの手をやめて峰をみる。

たか子。(わづかに自分を立直して)ちつとも存じませんでしたわ。——いつおいでになりましたの？

峰。えゝ、もう少ししまへに……

たか子。でも、よく……

峰。(やゝ間の悪さうにわらつて)あれツきりになつてをりますから。——光長さんにお知らせをいた

だいたのをしほに、お詫かたぐ、校長先生にお目にかゝりに出ました。

光長。(側からとりなすやうに)外のときでございますん。——とにかく。——かういふとにかくお

芽出度いをりでございますから。——(峰に)本来ならば、今日は、あなたにもいろ／＼働いてい

たゞかなければならないところで……

たか子。ほんたうですわ。

峰。いえ……(もち／＼する)

そのまゝ話途切れる……

間。

光長。(その氣不味さを救ふやうに)しかし、先生は。——先生はどこにおゐでになりますか？(あ

たりに眼をくぼる)

たか子。階下したにゐるでせう？

光長。いゝえ、階下にはどこにもおゐでがないので……

たか子。こゝへはまるツきり顔を見せません。

光長。(一人言のやうに)はて、どこへおいでになつたらう？

お久。(たか子に)お師匠さん、お茶碗や何かすぐにみんな洗つてしまひませうか？

たか子。いゝわ、あとで。——一しよにあとで洗ふから……

おあき。ぢやア、片附いたらあたしたちも階下へ行つて……

たか子。いゝわ、さうして……



おくめ。  
おたま。あゝうれしい……

光長、峰、とり残されたやうにぼんやりその應酬を聞いて立つ。——と、校長、そゝくさと階下から上つて来る。

光長。(いさんで) あゝ先生……(そばへよる)

校長。光長君……

光長。峰さんがみえました。

校長。いまそれを聞いたから……(可憐しきうに峰に) やア君……

峰。(いんぎんに) 御無沙汰いたしました。(前に出てあたまを下げる)

間。——階下に拍手のおと起る。

たか子。(校長に) 何ですの、今度……?

校長。三曲だ。

たか子。あら、もう……?

校長。尺八をふく人の都合で早くなつたんだ。

おあき。お師匠さん……(呼ぶ)

……外の、お久も、おくめも、おたまも聴きに行きたいこなし。

たか子。行かうよ、聴きに……

お久。でも、こゝ……

たか子。いゝよ、すぐ歸つて来れば……

響をとつて、たか子をさきに、いそいで四人階下へ行きかける……

校長。しづかに……

たか子。(ふり返つて) だめよ、どたばたしちやア……

五人、階下へ消える……

……ふと接穂を失つた感じ。——琴、三味線、尺八の入りまじつた音しづかに階下から聞えて来る。  
間。

光長。(校長に。——間の抜けた感じに) どこにいまゝでおゐでになりました? ——階下をはうぐおさがしいたしたんですか……?

校長。いや、番組のことで樂屋へ一寸行つてゐたもんだから……

光長。あゝ、それで……

校長。峰君、まアおかけ……



峰。有難うございます。

校長。光長君、君も……

光長。へえ……

三人、捨臺詞、とかくして腰を下ろす。——途端、階下からたか子そくそくと歸つて来る。

たか子。(校長に) あなた、あなた……(うつかりさう呼びかけて気がつく。——どきまぎする)

校長。何だ?(不機嫌にふり返る)

たか子。おゆきちゃんのところから、いま、おゆきちゃんを迎へに……

校長。迎へに?

たか子。え、おしさんの容體が急にわるくなつたんですつて……

校長。(狼狽て) おしまの? ——それはいけない。——それはすぐ歸さなくちアいけない……

たか子。え。

校長。で、だれが來たんだ、迎へに?

たか子。店の人です。

校長。まだゐるか?

たか子。ゐます。

校長。おやア、すぐ……(いひかけて) い、わたしが行く……(峰に) 一寸、君、失禮する……

光長。と、あの藤木の……

校長。(愚痴のやうに) 病人があるんだから來なくつてもいゝといつたんだ。——それをあゝいふ義理の堅いうちだもんだから……

校長をさきに、たか子、そのままあたふたと階下へ行く。

光長、峰、ぼんやりまた取残される。

間。——光長、ふいと立つて窓のそばへ行く。

光長。ふつてまゐつたやうですよ。(鈍い眼でみさだめる)

峰。雨ですか?

光長。え、その。——ぼつ、……

峰、立つて光長のそばへ行く。

峰。あゝ、これは悪いときに……(窓のそとをみまもる)

……琴、三味線、尺八の入りまじつたしづかな音。

間。

(幕)



## 第四幕

四六八

大寺學校の住居。(第一幕第二場に同じ)

十一月下旬(前まくの七八日あと)

……夜、六時すぎ。——校長、机のまへにすわつて、いつもの、琴の目ろくを書く仕事に一人しづかにしたがつてゐる。——水の底に落込んだやうなあたりのしづけさである。  
長き間。

校長、一トくぎりついたところで筆をおく。——ほつとしたやうに顔を上げ、時計をみ、眼鏡をとつて机のうへに置く。——ぼんやり立上つて四疊半のはうへ行く。  
間。

……長火鉢のそばに、晝間、たか子の出て行くとき支度して行つた膳が置いてある。——校長、その膳を持つて机のそばにかへつて来る。——すぐに膳のうへの銚子を取つて、そばの、瀬戸の火鉢に懸つた鐵瓶のなかに入れる。箸箱から箸を出す。蓋物の蓋をあける——そのあと氣を短く鐵瓶から銚子を出す。——一杯ついでとりあへず加減をみる——まだどといふ思入——猪口を下に置き、すぐまた銚子を鐵瓶のなかに返す。——そのとき玄關にだれか来る。

外の聲。 御免下さいまし……

校長、顔を暗くする。——不機嫌に立つて障子をあける。——玄關に出る……

外の聲。 藤木から出ましてございます。——これは、ほんの……(あとハッキリ聞えない)

校長。 いや、これは。——これはどうも御丁寧……

外の聲。 ……(ハッキリ聞えない)

校長の聲。 一寸どうぞ……

校長、送り膳の角岡持かくさかもちを下げて座敷にかへつて来る。——それをそこに置き、臺所へ行き、いろいろ皿小鉢のたぐひをもつて来る。——送り膳のしなぐをそれらにとり分ける……(そのまへに銚子を鐵瓶から出す)

やゝ長き間。

臺所のはうに誰か来る……

外の聲。 御免……

校長。(顔を上げる。——やゝ肩を擧めて) はい……

外の聲。 光長でございます……

校長。 お入り……(すぐ、また、顔をふせて料理をとり分けつづける)

大寺學校

四六九



光長、のっそりと入つて来る。

光長。(膳の出てゐるさまをみて) これは御飯中で……

校長。いゝえ……

光長。……(もそくする)

校長。構ひません……

光長。へえ……(すわる)

校長、とり分け終る。——空いた器をもとのやうに岡持へ入れ、それを下げて、また、玄關に出る。

校長の聲。わざ／＼恐れ入りました……

外の聲。いゝえ……

校長の聲。どうぞお宅へよろしく被仰つて下さい。——いづれ、二三日うち、お禮ながら是非うかゞ

ひます……

外の聲。……(聞えない)

校長の聲。だん／＼、しかし、お寂しくつておるでせう。——さうでせうつて。——御無理ありま

せん……

外の聲。………

校長の聲。ほんたうに、これは、お使ひ柄、……恐入りました。——御免下さい……

……使のかへつて行く氣配。

間。

校長、座敷へかへつて来る。——すわらないで、そのまま、四疊半のはうへ行く。——箸と猪口を

一人まへ持つて来る。

光長。(おづ／＼した感じに) たか子さんは……?

校長。(それほど不機嫌でなく) まだ歸りません。(すわる)

光長。どちらへか ?

校長。いや、今日は。——いろ／＼この間骨を折らせたので。——お久やおあきたちとその褒美

に……

光長。(のみこむ) あゝ左様で……

校長。どこか目黒のはうへ行くといふのに。——早く出て行けばいゝものを、矢つ張、女は……

光長。今日は、しかし、お出かけになるには持つて来いのお天氣で……

このうち、校長、もつて来た箸と猪口を光長のまへに置く。

校長。(銚子をとり上げて) 一つ、君……



光長。(不意をうたれたやうに) いえ、わたくしは……

校長。まア……

光長。わたくしは、いま、食事をいたしてそれから……

校長。さうだらうが、君。——今夜はおしまの速夜だ。

光長。あゝ……(膝を叩く)

校長。行かないといつてやつたらわざ／＼いま送り膳をしてよこした。——そのこれは御馳走だ。——君もおしまは手鹽にかけたことがあるんだから……

光長。さうでございますか？——では、まア、御遠慮なしに……(いへば矢つ張おづくした感じに

猪口をとり上げる)

校長、酌をする。——そのあと自分の猪口につぐ。——うまさうに飲む。

校長。どれでもいゝものに箸をつけて下さい。

光長。有難うございます。

校長。このよせものなんぞ好さうだ。——どうです……(皿の位置を變へる)

光長。へえ、いただきます……

校長。わたしは、さかなは、あるにそれは越したことはないが、なくつてもまた、一向こまらな

いはうでね。——それこそ福神漬でもあればそれでいゝ……(重ねて自分の猪口につぐ。——光長に) さア……

光長。おそれ入ります(猪口を出す)——しかし。——しかし先生が……

校長。……？(光長の顔をみる)

光長。いえ、先生が。——それほど先生がお好きとは、わたくし……

校長。何を？(飲む)

光長。いえ、御酒を。——それは、いえ、召上ることは承知してをりましたが、始終さう御晩酌を……

校長。いや、始終はやりません、日曜だけです……

光長。日曜だけ……？

校長。それも人の出入のあるときはやりません。——今夜はもう誰も來ない、何のじやまも入らない。——さうとみきはめのついたときでなければやりません……(ついで飲む)

光長。(やゝ狼狽て) と、わたくし。——今晚、これは、とんだ心なしを……

校長。いや、君ならいゝ。——君なら構ひません。

光長。しかし……



校長。君とは、わたし、一度いつか一しよに飲りたいと思つてゐたんでね……

光長。おそれ入ります。

校長。いえ、ほんたうに。——ちやうどいゝ機會だ。——遠慮なく、君……（酌をする。——自分のほうにもつぐ。——残りをあとの銚子にうつして鐵瓶のなかに入れる）

光長。どのくらゐしかし召上るので？

校長。そんなに、いえ、いまは飲らない。——たかく二合。——いゝところそのくらゐ……

光長。お一人でしかし……

校長。以前は飲んだ。——これで十四五年まへは一升酒……といひたいがもつと飲んだ……

光長。とてもそれは……

校長。で、いざとなると夜明し。——常住夜明しです。それでゐて、そのころ、平氣である日、子供たちの面倒がみられた……

光長。とても、それは、わたくしども……（わらふ）

校長。體も一つはよかつたに違ひないが、それよりも、大根は、畢竟そばにさうさせる相手があるからさうした亂暴も出来たんで。——光長君のまへだが、これ、酒はやつぱり氣のものでね……

光長。それは、もう……

校長。わたし、君に、以前一丁目の紺屋の露地で、野上の先代と隣同士ゐたことを話したことがあつたと思ふが……

光長。へえ、いつぞや。——いつぞや一寸うかどひました。

校長。その時分だ。——野上のその先代と暇さへあれば二人で飲つた。——これが、また、わたしに輪をかけた強の者でね。——いざ飲み出したとなつたらテコでもうごかない。——と、此方もつい負けない氣になつて……（さういひながら鐵瓶から銚子を出す。——一寸加減をみて、光長につき、自分につぐ。）すこし、これは、つぎすぎたか知れん……

光長。いゝえ……（飲む）

校長。その時分、まだ、二人ともとにかく空身だから暢氣だつた。だれに遠慮もなかつた。——その後、まア、兩方が家内をもち、わたしのほうには出来なかつたが、先方にはすぐ女の子が出来た。——さうなると、さすがに、それまでのやうなこともさうくは出来なくなつたが、それでもなほときくは、その網の目をくゞつて一寸々々寄合をつけた。——飲み出せば、これ、おたがひに女房も子供もない。——そこは若い時分の有難いところで、いくら周圍で何といはふと、さうなつたら聞くんぢやアない。——それぢやア随分失敗つた……（わらふ。——猪口をあけて光長にさす）一つ上げよう……



光長。へえ、これは……(うける)

校長。(酌をしながら)そもく野上のうちとわたしのうちとはさういふ關係に出來てゐるんだ。——だから、そのうち、先方も表店へ出る、こつちもこゝへ來る。……さうなつたとき、おたがひが東京にこれといふ知合をもつてゐない。——何かにつけて心細い。——そこで、兩方が、親類にならうなれよう。——といつたわけにまでなつた……

光長。有難うございました。(飲んで校長にかへす)

校長。(うけとつて)で、何事によらず力になり合つた。——(光長の酌をしようとするのを)いゝえ、いゝ、勝手につぐ。(銚子をとつて自分でつぐ)——家内の死んだときなんぞ、だから、來年がもう十七年になるが、葬式萬端、何から何まで一人で野上がやつてくれた。——いまでもわたしはその心いれを覚えてゐる。(飲んですぐまたつぐ。——光長に)さア……

光長。(やゝ狼狽て)いゝえ、もう……

校長。まア……

光長。わたくしはもう……

校長。いゝぢやアないか、まア……

光長。さうでございますか?——では……(猪口を出す)

校長。だから、わたしも……(酌をする。——そろくもう酔つて來てゐる)

光長。へ、おそれ入ります。

校長。その代り、わたしも、先方がいまの養子をとるときには骨を折つた。——たのむといふからよろしい。——わたしは引うけた……

光長。と、「魚吉」のいまの主人さんは、あれは……?

校長。男の子がないんで子飼からの奉公人を養子に直した。——紺屋の露地で生れた女の子。——  
——たつた一人のその女の子に娶した。——いまのあの内儀さんさ……

光長。と、家附の……?

校長。(それにはこたへず)が、その、店のその七藏をさうするについて、だ。——東京の生れで氣立もいゝ、目さきもよくみえる、稼業にも熱心だ。——どこに一つ難はない。——筆として持つて來いだ。——俺はさう思ふがどうだらうといふからわたしも賛成だ。——あれなら、未始終、必とうちのためになる。——といつたものゝ、さて、こゝに一つこまることがある。——搔暮目のみえないことだ。

光長。目の?

校長。いゝえさ、このはうがまるでいけない。(ものを書く手つきをする)



光長。それは、また……

校長。聞いてみるとそれが可哀想なんだ。——小さい時分、生さない仲の親の手に育つたんだ。

——それでさうなんだ……

光長。なるほど……(仔細らしくうなづく。——急に銚子をとつて校長につぐ)

校長。が、さうはいふものゝ、とりやうによれば此奴わけのないことだ。——仕込めばそれでいいことだ。——よろしい、請合つてわたしが一人前にする。——立派な後継ぎに仕立て、みせる。——さういつて、それから、毎晩店を仕舞つたあと一時間づゝわたしは當人を手許に呼んだ。——いろはのいの字からわたしは手をとつて教へた。

光長。……………

校長。それをちやうど二年つゞけた。——わたしも一生けんめいだつたが、先方はわたしよりもつと一生けんめいだつた。——うそをいへば、その二年の間、一ト晩といへども缺かさなかつた。

光長。……………

校長。一心はおそろしい。——それには元々性(た)がいゝんだからすゝみも早い。——その間に、君、新聞の續きものぐらゐ讀めるやうになつたぢやアないか……

光長。(感動したやうに)御丹精で、しかし……

校長。無論當人はよろこんだ。——わたしも面倒み甲斐のあつたのを喜んだ。——が、當人より、わたしより、誰より野上が一番喜んだ。——安心だ、これでもう安心だ。——その當座、顔を見るたんびにうるさくそればかりくり返した。(銚子をとつて自分につぐ)

光長。……………

校長。末始終(ま)必(きつ)とうちのためになる。——さういつたわたしの眼に狂ひはなかつた。——先代も、それは、ぼてふりから表店に仕上げたくらゐだから働きものだつたには違ひなかつた。——が、その先代が死んでいまの代になると、普請はする、奉公人はふやす。——とう／＼手を擴げて祝儀不祝儀の仕出しまでするやうになつた。——日一日と榮えるばかりで、わづか八九年のあひだに、この近所での、立派な、評判の店になつた。——あの世で、さぞ、先代が喜んでゐるだらうと思ふと人事のやうには思へない。

光長。……………

校長。といふのがまことに人情のある男でね。——無口で世辭けいはくはこれツばかりもないが、以前のことをいつまでも忘れないで、蔭になり日南になりわたしのことを思つてくれる。——いまでこそめツたに逢ふこともなくなつたが、三四年まへまでは、おもひ出したやうにとぎ／＼機嫌をきゝに來た。——で、よく、外へ出ちやア一しよに飲んだ。——そして、いつも、そのたん



びに、自分に出来ることなら何でもする。——遠慮なくいつてくれ。——先生のためならどんなことでもする。——懇々さういつたもんだ……

光長。……………

校長。さういはれると、さて、ぢやアかうしてくれ。——氣の毒だが、一つ、これをかうやつてくれ……とは、これ、光長君のまへだがいへないもんでね……

光長。……(うなづく)

校長。いざとなれば、だから、どんな無理でも聽いてくれる。——わたしはさう思つてゐる。——強情にわたしはさう思つてゐる。——だから、君、わたしは氣丈夫だ。——誰が知らなくつてもあの男だけはわたしの氣を知つてくれる——わたしも、また、あの男の料簡をよく知つて……(銚子をとつて自分につぐ。——いふことの辻褄がだん／＼合はなくなつて来る。——なぜそんなことをいふのか自分にもよく分らないかたち……)

光長。(正直に) しかし。——しかしわたくし……

校長。えゝ？(銚子をもつたまゝ聞きかへす)

光長。いえ。——わたくしは、いえ、萬々そんなことはない。——そんなことは風説にすぎない。——さう思つてをりますんですが……

校長。まア、君。——あげ給へ、それを……

光長。(へえ……)(いそいで冷えた猪口をとり上げる)

校長。さア……(酌をする)——あゝ、いけない、——これアもう空だ……

校長、すぐに立つて臺所へ行く。——光長、キョトンとした感じに一人残される。

間。

校長、新しい銚子をもつてかへつて来る。

光長。(校長のすわるかすわらないか)もツばら、しかし。——専らしかしさういふことを……

校長。な、何を……？(銚子を鐵瓶に入れる)

光長。げんに、いえ、今日も玉守君が来て心配してをるやうなわけで。——實は、わたくしも、返事にこまる仕儀で……

校長。……？(眼をバチ／＼させる感じに)

光長。しかし、また、いまのやうなお話をうかゞふと。——どこから、しかし、さういふうはさの出てまゐりましたもんですか……

校長。(急に) わたしには分らない。——何だね、それ？

光長。(へえ。——いえ……)



校長。(銚子を出して) さア君……

光長。へえ……

校長。……(光長に酌をする。——そのあと自分につぐ)

光長。(さぐるやうに) しかし。——お聞きぢやアございませんか、しかし……?

校長。聞かない。——何をさうそんなに……?

光長。いえ、市の學校の近々いよく出來ることになつたといふ……

校長。どこに?(猪口の手をとめる)

光長。それが。——それが、いえ、「魚吉」の……

校長。「魚吉」のどこに?

光長。「魚吉」のいまをりますあとに……

校長。だつて、君、あすこは。——あすこの地面は……

光長。「魚吉」のものださうで。——それを市がいゝ値に買上げたんださうで……

校長。……

光長。そのために、「魚吉」では、廣小路のはうにいまよりもつと手廣い店をみつけたとかめつてゐるとか……

校長。(急にわらふ) そんなことはない。——それはうそだ。(飲む。——すぐ、また、あとをつぐ)

光長。(さそはれて) いえ、それは。——わたくしも、それは……

校長。假りにもそんなことがあれば最初にわたしのところへ來るはずだ。——かういふ話がある

とまづわたしのところへさういつて來るはずだ。——それが何ともいつて來ない。——それがた

しかな證據ぢやアないか……

光長。(拍子抜けのしたやうに) へえ……

校長。そんな馬鹿なことがあるものか。——そんなことをしたらわたしが。——みすくこの學

校が。……(打捨るやうに) そんなめつたな眞似をする七藏ぢやアない……

光長。しかし……

校長。わたしはあの男が好きだ。——いまの野上のうちであの男だけが苦勞して來てゐる。——

あとのものたちはそれをして來てゐたい。——駄目だ……

光長。……

校長。どうしたんだ? ——ちツとも、君、飲<sup>や</sup>らないぢやアないか? ——なぜ、もつと。——ずん

ずんもつと飲<sup>や</sup>らないんだ? ——さ、お酌しよう……

光長。いゝえ、わたくしは。——わたくしは、もう……



校長。何をいつてるんだ。——いつまでおんなしことをいつてゐるんだ。——さ、出し給へ。——猪口を出し給へ……

光長。いゝえ、ほんたうにもう……

校長。ほんたうももうもあるものか。——折角いゝ心もちになつて來たんだ。——それをそんな野暮な。——さ、器用に飲み給へ……

光長。しかし……

校長。飲めといつたら飲み給へ。——何でもいゝから飲み給へ……

校長、無理に光長に、立續けに三四杯飲ます。——それに準じて自分もその以上飲む。

……光長、がくりと急に酔ふ。

校長。それより、君、峰君はどうした。——あれツきり、君、逢はないか？

光長。へえ、あれツきり。——あれツきりで……

校長。あのかきは残念なことをした。——もつと、あのかき、わたしは峰君とゆつくり話がかつたんだ。

光長。いゝえ、峰さんも。——峰さんもあとでさういつてをりました。——峰さんは、先生……

校長。(襟はずり取つて)わたしは峰君が好きだ。——七藏が好きなやうに、わたしは、峰君が好き

だ。——必と峰君も。——必と峰君もいまにもものになる……

光長。(うなづいて)なります。——必となります。——自分でも、來年は、必と辯護士の試験のうかるやうにする。——この間もはツきりさういつてをりました……

校長。君、飲まうぢやアないか。——今度、一度、峰君と三人でしみぐ、飲まうぢやアないか……

光長。飲みませう！——それは面白い。——いゝえ、それは面白い……

校長。峰君、來るだらうね？——來てくれるだらうね？

光長。來ます。——必と來ます。——喜んで必と來ます……

校長。わたしは好きなんだ、——わたしは峰君が好きなんだ。——だのに、わたしは、峰君とあんな氣不味いことをしたんだ。

光長。いゝえ、峰さんは。——峰さんは先生を誤解してをりました。——たしかにさうでした。

——が、あとになつて。——あとになつてそれが分りました。

校長。それでいゝ。——分つてくれゝばそれでいゝ。——人間は、君、みんなもちつ持たれつだ。

光長。全く。——それはもう全く……

校長。もちつもたれつ相生の。——もちつもたれつ相生の、松と松とのわかみどりだ。——實際



だよ。——ほんたうだよ……

光長。(うたふ)こつちに思へばその人も……

校長。一つ聞かせようか、わたしの淨瑠璃を……?

光長。あなたが? (校長の顔をみる)

校長。かうみえても、君、わたしのは上方仕込だよ。

光長。うかどひませう。——それは是非うかどひませう……

校長、眼を瞑ちてうたひ出す。——思ひもよらない美音……

校長。……ためかやいまは冬枯れて、すゝき尾花はなけれども、世を忍ぶ身のあとやさき、人目をつゝむ頬かむり、かくせど色香梅川が……

……光長、おなじく眼を瞑ちて聴く。

間。

校長。いけない。——久しくやならかつたらまるで聲が出ない……(銚子をとつてつぐ。——出ない)

何だ、おつもりか……

光長。先生、とつて來ます。——わたくしがとつて來ます。(すぐ立上る)

校長。すまない。——君を煩はしちやアすまないが……

光長。そんなこと。——そんなことア……

校長。鼠入らずの横んどこ。——米櫃のそばの——そこにさがみやの徳利が置いてある……

光長。分ります。——分ります……(ふらくしながら臺所へ行く)

間。

光長。(聲だけ)やア、これは。——ありません、先生……

校長。ない?(ふり向く)

光長。此方もうおつもりで……

校長。そんなわけはないが……(立ちかける)

光長。よろしい。——いゝえ、よろしい。——すぐに行つて來ます……

校長。どこへ?

光長。さがみやへ行つて一升すぐ持つて來るやうに申しつけて來ます。

校長。それは、君……

光長。いゝえ、よろしい。——わけアありません。

校長。しかし……

光長。いゝえ、よろしい。——大丈夫。——大丈夫……



光長、そのまま臺所から出て行く。——校長、障子のそばまで立つて行く。  
間。

校長、ふら／＼とまたもとへ返る。——それ／＼空いた銚子を未練にもう一度づゝふつてみる。  
——あきらめる。

校長。(眼を睨ちてまたうたふ) わしが父さま母さまは、京の六條の珠數屋町……  
……ぐたりとした感じ。  
間。

間。

校長、横になるともなく横になる。——くどく／＼何かつぶやくやうにうたひながらそのまようとうとする。——眠る。……

間。

(幕)

——了——



定價貳圓參拾錢  
郵送料拾貳錢

鴉 夜

昭和二年十二月五日印刷  
昭和二年十二月十三日發行

著作者 久保田万太郎

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

振替東京

一八八八八  
二〇〇〇〇  
四九八七六  
番番番番番

東京小石川區江西戸川町 富士印刷株式會社印刷



・編 會 協 家 藝 文・

■ 年 刊  
日 本 小 說 集

第一集・大正十四年版  
第二集・大正十五年版  
第三集・昭和二年版

毎年一回づゝ出版する年刊小説集で、各冊、最近の文壇に活躍せる約三十家の代表作一篇づゝを採つて成せるもの。流派の錯綜と、傾向の多角と、個性の自由と、分野の濶大と、現下小説界の壯觀は、曾て見ざる所、従つて色彩の豊富なる事、此の一卷の如きは、他に類例を見る事が出来ない。

四六判紙裝  
各冊五百頁  
價各貳圓づゝ  
送料各拾錢

■ 年 刊  
日 本 戲 曲 集

第一集・大正十四年版  
第二集・大正十五年版  
第三集・昭和二年版

現代劇文壇の代表作家の、最近一ヶ年間の作品中より代表的ものを輯めて一卷となし、毎年刊行を繼續して、やがて事實に於て一系の『現代大戲曲全集』たらしむる方針の下に編輯したるもの。なほ添ふるに、各作家の作品目録、作品梗概等を以てし、戲曲年鑑としての利便をも併せてゐる。

四六判紙裝  
四百六十頁  
價各貳圓づゝ  
送料各拾錢

久 保 田 万 太 郎 著 作

■ 夜  
■ 心  
■ 雨  
■ 末  
■ 妻  
■ 露

こ  
こ

鴉 鶯 空 枯 子 芝

戲曲集 戲曲集 戲曲集 劇作集 創作集 戲曲集

價貳圓參拾錢 價貳圓參拾錢 價貳圓參拾錢 定價壹圓 定價五拾五錢 定價八拾錢 定價七拾錢  
郵送料拾貳錢 郵送料拾貳錢 郵送料拾貳錢 郵送料六錢 郵送料六錢 郵送料六錢

新 潮 社 出 版



# 現代脚本叢書

各作家の最も自信ある作品五六篇を輯めて一巻としたもので、舞臺に上演された作が多い。  
現代戯曲界の各方面を網羅せる代表的傑作選集として、盛んなる愛讀を受けてゐる。

中判(2)二百卅頁 定價各壹圓  
田中良氏裝畫 送料各六錢

(1) 未能力者の仲間 武者小路實篤	(2) 飢 渴 長田秀雄	(3) 法成寺物語 谷崎潤一郎	(4) 髑 髏 舞 吉井勇	(5) 阪崎出羽守 山本有三	(6) 雨 空 久保田万太郎	(7) 秦の始皇 灰野庄平	(8) 七年の後 近藤經一
(9) 第一の世界 小山内薫	(10) 茅の屋根 菊池寛	(11) 次郎吉懺悔 鈴木泉三郎	(12) 牡丹燈籠 長田秀雄	(13) 最初の奇蹟 藤井真澄	(14) 投げ棄れた指輪 金子洋文	(15) 生命の冠 山本有三	(16) 一日の平和 正宗白鳥

(17) 陶淵明 長與善郎

## 諸家戯曲集

<p>菊池 寛氏著 ■ 時の氏神 中判特製 壹圓拾錢 送料拾錢</p> <p>里見 淳氏著 ■ 妬 心 四六判特製 壹圓七拾錢 送料拾錢</p> <p>武者小路實篤氏著 ■ 桃源にて 中判特製 貳圓 送料拾錢</p> <p>藤井真澄氏著 ■ 新魔王 中判並製 壹圓五拾錢 送料八錢</p> <p>菊池 寛氏著 ■ 藤十郎の戀 菊判特製 八拾五錢 送料六錢</p> <p>武者小路實篤氏著 ■ 小さな世界 中判特製 貳圓 送料拾錢</p>	<p>菊池氏が久しぶりの戯曲集である。眞似、浦の苦屋、震災評、丸橋忠彌、夫婦、石橋山、時の氏神等。皆世評の高いものゝみだが、殊に『時の氏神』と『眞似』は作者自ら會心の作と稱するものである。</p> <p>盲藝術家の戀愛苦藝術苦を主題とせる處女作『新樹』以來、第一の姦夫を殺せる老いたる夫と、第二の姦夫との深刻なる心理を描いた『たのむ』に至るまで作るところ總て九篇。氏の戯曲全集である。</p> <p>伐られても、咲く桃の花に人間不撓の力を寓して震災復興の劇壇に喝采された『桃源にて』、作者身邊の戀愛問題を思はしめる『張男の最後の日』以下『一日の素盞鳴尊』等の戯曲八篇、及び小品數篇。</p> <p>奇矯警拔の表現を以て熾烈なるプロレタリア精神を高揚する藤井氏の新戯曲集である。『窟』『窟をいで』、『孤獨の底の日蓮』、及び『新魔王』の四篇。作者の面目最も鮮かな、新時代の新藝術である。</p> <p>菊池氏の作中最もよく舞臺に演ぜられ世評喧しき名篇を集めて一巻とした。藝術の爲に人妻の愛を玩びて遂に死に至らしむるの『劇』藤十郎の戀』を始め、父歸る、屋上の狂人、奇蹟、恩讐の彼方等。</p> <p>二つの心、或日の一休、わしも知らない、二十八歳の耶蘇、罪なき罪、三和尚、無夢等。武者小路氏の作中、最もよく上演された高名の戯曲の外、別に小説數篇を収めた。『武者小路選集』第一。</p>
--	---

56  
20



三十九作家の一幕物選集成る  
 我が劇文壇空前の偉觀、空前の大出版也。

# 現代戯曲大觀

## 第十版

布表紙天金最上製  
 紙數大版壹千頁  
 定價金四圓五拾錢  
 郵送料拾八錢

### 劇作家協會編

現下、劇壇の新人、すべて三十有九家、各々其の最も會心の作となす一幕物を自選し茲に空前の大選集成る。今や創作劇の全盛期に會して此書が如何に時の宜しきを得たかは多言を要しない。光彩陸離たる我戯曲界を記念す可きエポックメイキングの一大出版である。

#### ◆氏九十三稿密◆

秋野雨雀 近藤經一 能島武文 鈴木善太郎  
 長谷川時庄 久保田万太郎 岡田八千代 鈴木善太郎  
 林原青木 武田路實 岡田八千代 鈴木善太郎  
 伊藤雄之助 長中 岡田八千代 鈴木善太郎  
 池田藤花 中島 岡田八千代 鈴木善太郎  
 川村花 善俊 岡田八千代 鈴木善太郎  
 北尾龜 長中 岡田八千代 鈴木善太郎

### 現代小説選集

現代小説壇の代表作家三十六氏の傑作を輯めたる一大選集

島崎藤村 有島武郎 長谷川天溪  
 谷崎潤一郎 正宗 白鳥  
 中村見 成星湖 水瀧太郎  
 藤森 相上 小島

芥川龍之介 廣津和郎 小川未明  
 加能作次郎 久保田万太郎  
 菊池寛 吉田紘二郎  
 谷崎 吉田紘二郎  
 池田 吉田紘二郎  
 藤花 吉田紘二郎  
 川村 吉田紘二郎  
 北尾 吉田紘二郎

布表紙天金最上製  
 定價金四圓八拾錢  
 郵送料拾八錢

白石實三  
 佐藤春夫  
 有島武郎  
 秋江純樹



56  
20





568  
208



